

# 紀行文

馨堂足下。自分手於西嶺以來。一日三秋。思望曷已。不佞以今月八日。自赤關揚帆。至于內裡。是日也。天晴風順。舟行甚疾。舟及海心。風俄起。波濤如山。時々飛散。入舟中。瀕人衣。人皆以笠捍之。既而風彌甚。濤彌大。如虬龍之鬪。如鼉鼉之走。舟動搖不定。舟中之人。面無人色。甚則至于為嘔吐。同遊杏所。亦以衣袖掩面。不能開眼。而予獨體中清爽。意氣自若。東望周洋。西眺玄海。前觀二豐之諸山。後顧長州之諸山。吟懷豁如。神氣雄壯。快甚。于平生不好登舟。々々則未及數十武。目眩發嘔。如醉如醒。而今日與平生大異如此。實可怪矣。蓋海若風伯。示此奇怪變幻俾。予文章長進者非耶。但憾不與足下同觀焉耳。既而舟達于大裡。則日既夕矣。倉皇趣小倉而宿焉。其翌發小倉。趣赤間。途中見山下松柏陰林。其下蓋有孝子正助墓云。予平生聞忠臣孝子之事。感激不能自己。但憾日暮程遠不得往弔耳。翌日發赤間。過香椎八幡祠。々前有長松臨高岸。至松下憩焉。則紫溟在眼。風恬波靜。瑠璃一碧。茫々乎不見際涯。有青松白沙。橫截蒼海者一百里有奇。不問而知其為海之中道。假使足下目之。必有佳作。不佞不得詩。負勝景者不少。迂途趣名島。得見所謂帆檣石者。石大二圍。長可五丈。斷為八。處々有鐵箍痕。傳神后征韓

時之帆槩化石矣。予雖不知其然平否。決非人為之所能也。聞又卽化石者。時潮盈不得見焉。乃趣箱崎。過十里松者。云是豐公在名護屋時。千利休烹茶松下。以進豐公。因名焉。乃賦詩云。休叟遺芳春翠濃。林間吟到夕陽春。豐家已遂茶烟滅。千古唯看十里松。十二日發霸家臺。過都府樓遺趾。石礎數十猶存。樓之傑構可想焉。拾殘瓦數枚。懷古愴然者久之。既而過觀音寺。堂宇已傾仄。猶有木像三座存焉。鏤金零落。出寺。謁菅右府廟。夕宇巖々然。金碧奪目。廟下飛來梅。老幹槎枒。花開如雪。古香馥郁。樹下低徊久之。忽聞觀音寺鐘聲殷々報夕。因憶相公都府樓唯看瓦色一聯。反復吟之。不覺泫然泣下。嗚乎公之在謫居也。柴荆寂寥。寺在近而獨聞鐘聲。樓在近而唯看瓦色。其幽鬱可知矣。而今則柴荆變巖々之高堂。府樓化為田畝。物之變態如此。遂賦詩一章而去。十有五日。入熊城。十有八日。寓于韃邨書屋。諸生四十餘人。勸學不懈。弦誦之聲。琅々徹壁。自昧爽至夜半而止。諸生之刻苦。雖出于天性乎。抑亦先生之教導所使然也。名下果虛土云。足下之好山水也。與不佞同。足下之好文章也。亦與不佞同。但憾此遊之與足下同之耳。故欲具記所經之名山勝水及古趾奇事。使足下如親遊其地。然筆拙不能寫其萬一。若夫耶馬溪霧州溫仙等諸名山。不佞未得遊其地。他日若得遊焉。則記而寄之耳。餘期後雁。伏以自愛。

以下四篇寓木門時之作時年二十八

## 釈文

馨堂に書して寄す

馨堂足下。

西嶺手を分けてより。一日三秋の思い望みて曷んぞ已に今月八日を以て詔らず。赤關より

帆を揚てここに内裡に至る。是れ日天晴れて風順いて舟行甚だ疾し。舟は海心に及びて風俄かに起

り波濤は山の如く。時々飛散して舟中に入り人衣に瀕り人皆笠を以て之を捍ぐ。既にして風彌りり

その濤彌大きく。虬龍の鬪いの如く鼉鼉これ走るが如し。舟の動揺定らず。舟中の人面に入色

無し。甚だしく則ちここに至りて嘔吐を為す。同に遊ぶ杏所は。亦た面を掩い衣の袖を以て眼を開

くも能わずして。予は獨り體中清爽意氣自若東に周洋を望み西に玄海を眺める。前に二豐の諸山を

観る。後に長州の諸山を顧みる。吟懷豁如。神氣雄壯快甚だしくも。平生登舟を好まず。登舟

則ち數十武にも及ばずして。目は眩み嘔を發し酔うが如く醒めるが如く。今日は平生と大きく異る此

の如く。實に怪しむ可し。蓋して海は風伯の若し。此の奇怪を示して幻俾に變る。予文章を長く進め

るは邪に非らず。足下と同一に觀せざるせざるをを憾み既に舟はここ大裡に達す。日は既に夕に倉皇小

倉に趣きて宿る。其の翌小倉を發ち。赤間に趣き途中山下松柏の陰林を見る。謂うに其の下孝子正助の墓を有するかな。予は平生忠臣孝子の事を聞いて感激自己に能はず。但し憾みは日暮れて程遠く弔に往くを得ず。翌日赤間を發ちて香椎八幡祠を過ぎる。祠前長松有りて高岸に臨み松下に至りて憩う。則ち紫溟眼に仕する風は恬らか波は静かに瑠璃一碧茫茫として際涯を見ず。青松白沙に有りて。蒼海を截ちて横たわる一百里も有り奇しきあり。問はずして其の海の中道を為すを知る。假に足下これ目にして必ず佳作を有す詩を得ず。佞ず勝景を負つて名島に趣き。帆の檣石謂う所を見るを得る。石は大きく二圍長さ五丈ばかり斷ちて八つに為す。處々鐵箍痕有り。傳う神后征韓時の帆檣石に化したか。予は其れ然りか否やは知らずと雖も。決めて人の為す所に非らず能くところなり。聞くことは又た槩の化石は時に潮が盈ちて見得ず。そこで箱崎に趣き十里の松を過ぎる。云う是れ豊公名護屋に在りし時。千利休茶を烹る松下に似たる。豊公に進ぜして。因つて名す。乃ち詩を賦して云う。

休叟遺芳春翠濃

休叟の遺芳 春翠 濃やかなり

林間吟到夕陽春

りんかん ぎん いた せきやう すす  
林間 吟じて到れば夕陽の春く

豐家己滅遂茶烟

ほうけ すで と さえん めつ  
豐家 己に遂げて茶烟 滅し。

千古唯看十里松

せんこ せんこ  
千古 唯だ十里の松を見る

「七言絶句上平声二冬韻」

十二日霸家臺（博多）を発ちて。都府樓の遺趾を過ぎる。石礎數十猶お存りて。樓の傑構想う可し。殘瓦

數枚を拾う。古く愴然之れ久しくを懷つ。既に觀音寺を過ぎて堂宇已に傾仄猶お木像三座存する有り。

鏐金零落して寺を出でて。菅右府廟を謁える。廟宇疑々然金碧目を奪う。廟下飛來の梅老幹槎枒花

開いて雪の如し。古香馥郁樹下低徊すること之れ久しく。忽ち觀音寺の鐘聲殷々々を報せる。相公

都府樓唯が瓦色一聯を看る反復之れを吟じて覺えず泫然泣き下る。嗚乎公の謫居に在りしの。柴荊

寂寥寺は近くに在り獨り鐘聲を聞く。樓は近くに在りて唯だ瓦色を看る其の幽鬱知る可し。そして

今則ち柴荊が變りて疑々の高堂に為り。府樓化して田畝になる。物の變態此の如し。遂に一章詩を賦

して去る。十有五日。熊城くまじょうに入る。十有八日。ここ軒邨書屋いそんしよおくに寓よる。諸生しよせい四十餘人勸學懈かんがくおこたらず。弦誦げんしやうの聲琅々なるなる壁に徹てつる。昧爽まいそうより夜半に至りて止む。諸生しよせいの刻苦こくここれ天性てんせいより出ずと雖も。抑そもそも亦た先生の教導し使しむ所然りなり。名を下して虚士きよし無しを果たす云つ。

足下之れ山水好し同じく佞でいわず。足下は之れ文章に好し亦た佞でいわずとも。ただ足下と同に此の遊せざるを憾ひんむ故ら具に記せんと欲す。

この名山勝水及び古趾こしの奇事きじを經る所足下其の地に親しく遊ぶ如くを使しむ。然し筆拙其の萬一を寫すを能わず。若し夫れ耶馬溪霧州温仙等諸名山佞でいわず未だ其の地に遊ぶを得ず。他日若し遊ぶを得ん。

記して之れを寄す。後雁こうがんで餘りを記す。伏して以て自愛。

以下四篇木門に寓もくもんす時之れを作る時年二十八

## 語釈

響堂けいどう 大阜響堂たいふけいどう 南部五竹の学友、養老館で五竹、東澤写と共に藩校の三博士と称せられた。足下ちか 足の下、人に対する敬称、あなた、き

み 貴下。西嶺せいれい 西方之意、中国五山。曷か なに、なんぞ、いつか。已み 已々、さだまる。赤關あかぜ 山口県下関市、赤間関。内裡だいり 天子の宮殿。瀕ひん 汀、辺、すれすれに近づく。捍かん 防く、守る。彌び わたる、時の経過。虬きう 虬々、みずち、水龍。鬪たう 鬪う。鼉げん 大スッポン。鼉た 鰐の一種。嘔吐おうと 吐き出す。杏所きやうしよ

宮宅杏所<sup>みやけ きやうしよ</sup>医者で南部五竹の西遊に同行した人。清爽<sup>せいそう</sup>清らかで爽やか。周洋<sup>しゅうよう</sup>周防灘。玄海<sup>げんかい</sup>玄界灘。二豊<sup>にほう</sup>豊前と豊後。長州<sup>ちやうしゅう</sup>周防と長門の二州、山口県。懷<sup>かい</sup>想う懷かしむ。懷<sup>かい</sup>豁<sup>かく</sup>開ける、広い、広々としたさま。懷豁<sup>かいかく</sup>心が広い、度量が大きい、懷<sup>かい</sup>が大きい。發嘔<sup>はつおう</sup>嘔吐する。醒<sup>せい</sup>酩<sup>めい</sup>酩<sup>めい</sup>蓋<sup>けい</sup>思つに、なんぞ。風伯<sup>ふうはく</sup>風の神。奇怪<sup>きがい</sup>怪しい、不思議。變幻<sup>へんげん</sup>幻のように、忽ち現れ忽ち消えること、変化の早いこと。俾<sup>ひ</sup>しもべ、睨む、横目で見える、従つ、せしむ。憾遺憾<sup>かん</sup>残念に思ふ。大裡<sup>だいり</sup>内裡と同意。倉皇<sup>そうわう</sup>慌てるさま、あたふたするさま。赤間<sup>あかま</sup>福岡県宗像市赤間。香椎八幡<sup>かしはちまん</sup>福岡市東区、戦の神。祠<sup>し</sup>祠。恬<sup>てん</sup>安らか、物事に甘んじて心がさばさばとしている、あつさりしている、へいきなさま、静かなさま。瑠璃<sup>るり</sup>紺青色の美玉、七寶の一つ。一碧<sup>いっへき</sup>青一色。際涯<sup>さいがい</sup>果て、限り、限界。茫々<sup>ぼうぼう</sup>広々と果てしないさま、ぼうつとしてはつきりしない。白沙<sup>はくさ</sup>白い沙。蒼海<sup>そうかい</sup>青い海。截<sup>さい</sup>切る。途迂<sup>とゆう</sup>途中で迂回する。帆樑<sup>はんりやう</sup>帆柱。鐵箍<sup>てつこ</sup>鉄のたが。神后<sup>しんこう</sup>神功皇后。征韓<sup>せいかん</sup>韓国を征伐。桀<sup>しやく</sup>權、舵、櫓、舟を漕ぎ奨める道具。盈<sup>えい</sup>集める、孕む。豊公<sup>ほうこう</sup>豊臣秀吉。名護屋<sup>なごや</sup>秀吉朝鮮出兵の前線基地、佐賀県。千利休<sup>せんりきゅう</sup>茶の宗匠。烹<sup>ほう</sup>煮る、煎じる。休叟<sup>きゅうそう</sup>千利休、翁、老人。遺芳<sup>いほう</sup>死後に立派な物を残す、名声、詩文、書画などを言つ。春翠<sup>しゅんすい</sup>春の翠。豐家<sup>ほうけ</sup>豊臣家。茶烟<sup>ちやえん</sup>茶煙り、烟。千古<sup>せんこ</sup>千年の古くから、大昔より。霸家臺<sup>はかた</sup>博多、砦、城。都府樓<sup>とふろう</sup>都よりの出先機関の建物。遺趾<sup>いし</sup>遺された跡。樓<sup>ろう</sup>樓閣、建物。傑構<sup>けつこう</sup>傑作な構え、立派な構え。懷古<sup>かいこ</sup>昔を偲ぶ、懷かしむ、想う。愴然<sup>そうぜん</sup>せつなく悲しむさま。堂宇<sup>どうう</sup>堂の軒。傾仄<sup>けいへつ</sup>傾く。鏐金<sup>ろうきん</sup>艶のある金色。零落<sup>れいらく</sup>落ちふれ、剥げ落ちる。菅右府廟<sup>くわうふでう</sup>右大臣菅原道真公の廟。謁<sup>えつ</sup>訪れる、まみえる、身分の高い人に会つ、拝謁。廟宇<sup>びやうう</sup>廟の軒。巖々然<sup>がんぜん</sup>高く拔きんでるさま、じつとそそり立つさま。金碧<sup>こんへき</sup>金色と青色。廟下<sup>びやうか</sup>廟の下。飛來<sup>ひらい</sup>墩とんで来る。老幹<sup>らうかん</sup>老樹の幹。榀材<sup>さざ</sup>ギザギザの枝が細かく入り乱れ突き出るさま。古香<sup>こかう</sup>昔の香り。馥郁<sup>ふいく</sup>香りの高く立ち込めるさま。低徊<sup>ていかい</sup>立ち去り難くあちこちと歩くさま。殷々<sup>いんいん</sup>雷や車の音の轟くさま、にんが心で泣きわめく声の大きいさま、憂えるさま。相公<sup>さうこう</sup>一聯<sup>いっれん</sup>一連の。憶<sup>おく</sup>記憶、想い起こす。泫然<sup>げんぜん</sup>涙をばらはらとながすさま。泣下<sup>きゅうか</sup>涙を流す。謫<sup>たく</sup>責める、咎める、左遷する、官位を提げて遠くに送る。謫居<sup>たくきょ</sup>左遷されたその住まい。柴荊<sup>さいけい</sup>柴や荊。寂寥<sup>せきりょう</sup>寂しい、奥深くて広く寂しい。疑々<sup>ぎぎ</sup>高く聳えるさま。府樓<sup>ふろう</sup>役所の建物。田畝<sup>でんちう</sup>田や畝。幽鬱<sup>ゆううつ</sup>奥深く鬱蒼。熊城<sup>くまじょう</sup>熊本城下、市街。鞆邨<sup>いそむ</sup>木下鞆邨、熊本藩士、藩校時習館訓導、五竹の師。書屋<sup>しよや</sup>学舎。寓<sup>いふ</sup>寄寓する、仮の住まい。諸生<sup>しよせい</sup>諸

学生。勸學かんがく〓 学問を励まし奨める。懈かい〓 怠る、怠ける。弦誦げんじう〓 張った大きな声で読む。琅々ろうろう〓 金属や玉が互いに触れて鳴る音のさま、鳥の清らかな囀り。味爽ばいそう〓 朝の暗いうち。刻苦こくく〓 非常な努力をする。天性てんせい〓 生まれながらの性分。虚士きよし〓 空虚の士、うわべだけの人。古趾こし〓 古の跡。奇事きじ〓 珍しい事、不思議な事。具記ぐき〓 具体的に記す。後雁こうがん〓 雁は後に必ず帰って来る。木門もくもん〓 木下韃靼いそんの門。

火之後州。多崇山峻嶺。而阿蘇為第一。阿蘇在熊城東北。六十里而遠。山蓋生硫黃。故山上常燃。出白烟。々出處有池。曰御池。々々而下。里許。有堂。曰本堂。距蘇山東北。九里。為宮地。々中有祠廟。曰阿蘇宮。比堂。極廣大。彫鏤之美。精緻可驚。祀健盤龍命。司祠者。曰大宮祠。々々之先。為速瓶玉命。崇仁之時。為阿蘇國造。速瓶玉即健盤龍之子也。子孫世掌其職。以至于今。戰國時。阿蘇氏多蓄兵馬。雄長一方。故其家。藏古帝王詔宣。及古名將書牘。極多。又藏一寶刀。號螢丸。其所最秘云。余之在後肥。欲遊阿蘇且觀詔宣寶刀之類者久矣。一日。聞木先生。與宮司善。謀諸先生。々々告其意宮司。々々諾。於是。戊午四月三日。與友人某々同。遊阿蘇。是日大霧。出府城東門。霧小霽。自城至大津。老杉夾路。森々成列。午後踰二重嶺。々高而嶮。左右山皆童。青草蒼々然。多放馬牛。或立。或眠。或乳。或嚙草。自得閑舒。可畫。踰嶺下者。數十步。流汗成珠。不堪熱。乃脫衣。着單衣。據石而臥。則蘇山當面前。白烟瓢空。臥而看之。自有太上隱者之趣。乃出紙筆。摸山而去。日夕至內牧犬塚某家宿焉。某設酒飯。侍之甚優。酒間談及。近村民得一蟲類蛇。四足而爪。重斷而重齒。莫知其為何物。或曰龍子也。

飲及夜半而寢。四日。起。則日已三竿矣。巳時。辭犬塚。至宮地。途中遇雨。及阿蘇宮。則雨止。而雲未霽。祠前有鷄。成群。皆雄。云以雌雞來放之。皆化為雄。謁神畢。過宮司宅。其門扉朽柱頹。殆欲倒。其堂至廣。桐楹撓仄。聖壁頽壞。屋茅亦處々陷凹。上生青松數十株。其零落可知焉。敲扉。則一老翁出迎。延余坐。々定。奴捧茗而出。少頃。有一人。捧兩函而來。置之几上。几下展。曰觀焉。余近。老翁開一函。則多南朝以來詔宣。中有題後奈良帝宸翰者。尤高古。書以假名。字體婀娜。而辭柔婉。極似出于椒房妃嬪之手。蓋帝託椒房。以詔宮司也。又開一函。則將軍教書。居多。菊池大友。応酬之書。亦頗多。又有稱足利尊氏髻文者。絹素。方二寸。書以細楷。書麗而辭簡。蓋密納諸髻中以來。以募兵者也。其餘。蠹書充棟。不遑寓目。余請觀寶刀。曰天陰則禁觀。待晴而可。乃辭而出。宿宮地旅舍。五日大雨。既不得登蘇山。又不得觀寶刀。坐雨岑寂殊甚。某々曰。晴不可期。吾則趣矢部。乃辭去。余與仁鄉。留待晴。午後。命酒。相對覓句。至夕而止。六日雨晴。觀寶刀。々々長三尺三寸五分。入柄處。一尺一寸有奇。廣一寸余。厚三分餘。左右鏤刀形。下起入柄處之半。上至距鋒一寸。又距刀形一分。循刀形鏤一小渠。右旁鏤梵字二劔一。左旁鏤如護摩者二。長三寸許。入柄者一分許。刀質帶紫色。而刃白。刃文如蕨芽。自鋒下四寸許。刃小缺。相傳。其先惟澄。用之于多々良之戰。奮勇大戰。刃缺者數處。少頃見有螢來止缺處。異而舉扇撲之。

一螢隨手墮地。視之乃刃之缺者也。餘則皆合如故。由是得螢之名。或曰。其墮而在地者。熒々如螢。故名焉。其入柄處。銘曰。永仁五年三月一日來國俊。實希有神物也。觀畢辭而去。過防中。訪山內某。夕煮鷄卵。暖酒。炊飯。食之。食畢。登蘇山。夕多黃精續隨子獨活。其他。異卉奇草。挾路而生。余謬本草。不能盡知也。山復有石呼硯者。長可六尺。廣稱之。上有一孔。如硯。又聞有呼皿者。狀似皿。逢一老夫。問其所在。曰既過之矣。忽見四山俄頃起雲。蓊々然至脚下。余笑謂仁鄉曰。我與子共登白雲。以仙乎。相顧而笑。此至本堂。日已西昃。堂下有茶店。夕主尼余曰。自此以上。國法禁西後登攀。乃下。趣湯谷。路行山背。絕無人跡。日已暮矣。淒然神悲。忽聞空際。攄然有聲。驚視之。有怪禽。頡頏空中。須臾褰霄而去。路旁有獨活。極肥大。共拔之。得數莖。既而至一廣豁處。多放牛馬。仁鄉曰人家將近。行數十步。果有黃茅數屋。有溪底。即湯谷也。谷出溫泉。浴焉者頗多。余乞宿。即主人引至一茅樓。進以飯羹。焦臭不食。樓屋破壁壞。座見星辰。溪風入坐。寒甚。乃沽酒。切所得獨活。和酢食之。味甚香美。飲畢就睡。夜半酒醒夢驚。杜鵑聲繞屋不已。卿思泉湧。不能複寢。耿耿達曙。七日。早晨再登阿蘇。是日大霧罩山。纔辨蹊路。己時至本堂。霧漸霽。自堂自上。山不生一草。石皆焦赭。行數百步。霧復起。及至御池。霧愈深。忽聞人語在近。而不見其人。少頃見一老夫來。甲語乙曰。吾登此者數矣。池中或現五色水。或沸。或躍。或燃。

或生烟。或發聲如雷。今日霧深皆付不見。可憾耳。言訖即下。余亦下。至茶店。喫午飯。畢。霧忽霽。又上。霧又生。然不甚深。髣髴辨池水。深不測。周迴里許。絕壁万仞。臨之。神悸股栗。若一失足。則生墮于焦熱地獄。真可懼矣。余再登。而五色之水。則不能見也。乃賦一詩而下。十數步而霧復霽。顧見白烟生池上。油々然。余謂仁鄉曰。雲霧變幻。不常亦太甚。乃高吟貧交行而下。取路於本堂右。路甚險。未時。至一溫泉。名地獄。浴者極多。余亦浴焉。溫泉上。數十步。有大屋八九。設鐵釜數百。煎礬。余乞得兩大礪。屋上岩石間。處々噴烟。就而視之。硫黃之氣薰蒸而上也。熱不可近焉。硫氣着石。成黃色。石旁多硫黃。可拾。嗽溪流。味酸澁。帶礬氣。不可飲也。溫泉旁有茅屋。乃往而宿焉。八日天晴。發地獄。取道於其右。至滴珠。亦有溫泉焉。茅屋四五間。在溪間。有小瀑布。懸于林木之間。琤然而鳴。清涼可掬。至黑川。過石砮。數十步。有瀑布。名曰數鹿流。絕壁蒼崖。左右相圍。上有樹木。鬱然叢生。瀑布懸其間。霏々噴雪。其聲如雷。轟轟然而下。匯成碧潭。濺沫散亂其上。白碧相映。奇不可狀。余至樹陰。藉草而坐。取腰間所插龍笛弄之。聲震林木。響破蒼崖。瀑笛相和。如淵龍一吟雲起雷奔。曲闌。不忍去。憩焉者久之。午後至大津。喫蕎麥麵。飲濁酒。出驛顧。見來路。則蘇山隱見於行杉之間。依々如送余者。余亦縵々。駐節指之。謂仁鄉曰。是我與子。昨日所遊。而今則髣髴見之於天際。我與子。各千里異鄉之人也。此遊。豈可復哉。

我與子。各歸其國。間居獨處時。憶起此遊。則蘇山千里。君千里。我亦千里。我欲見君。不可復見。君欲見我。不可復見。我與子。欲見蘇山。亦不可復見。當此時。其感慨何如哉。昔羊叔子。常遊硯山。百姓為建碑焉。望者皆墮淚。今我與子。此遊雖不可常。亦將記此遊以示君。々歸鄉之後。展吾記而對之。悲昔遊之不可復。感少年之若夢。歎老之將至。淚潸然將墮之。豈翅墮淚之碑而已哉。遂作遊蘇山記。以示仁鄉。于時戊午四月八日。也

## 釈文

### 阿蘇山あそさんに遊ぶあそぶを記す

火ひの後州ごしゅう「肥後ひごの州しゅう」崇山すうざん峻嶺しゅんれい多く、蘇山そざんは第一だいいちを為す、阿蘇あそは熊城くまじょう（熊本）の東北に在りて、六十里遠く山は硫黄いおう生じ故に山上は常に燃え、白烟はくえん出でて烟出けむりる處に池が有り御池ごちという、御池を下ると里許さともとに堂が有り本堂という、蘇山そざんの東北を距れて九里宮地はな駅えき（宿場）を為す。駅中に祠廟しじょう（神社）が有りて、阿蘇宮と曰う。堂に比べて極めて廣大で彫鏤ちやうらうの美精緻せいち（緻密で細やか）は驚く可しである。

健盤龍命たけいたつのみことを祀り祠を司るは大宮祠だいぐうし、宮祠の先は速瓶玉命はやみかたまのみことを為し、崇仁すじんの時に阿蘇あその國造くにのみやつこを為

し、速瓶玉は即ち健盤龍の子なり。子孫世に其の職を掌る以て現在に至る。戦国の時阿蘇氏多く兵馬を蓄えて長く一方に雄し、故に其の家古く帝王詔宣を藏すに及び、古の名將の書牘極めて多く、又一寶刀を藏す、螢丸と號す、其れ最も秘に云う所、余は之れ後肥に在り阿蘇に遊ばんと欲し、且つ詔宣寶刀類は久しく觀る、一日木先生に聞き宮祠と善く諸先生と謀らい、諸先生其の意を宮司に告げ宮司諾う（承諾、承知）是れ戊午、一八五八、四月三日、友人の某々と共に阿蘇に遊ぶなり。是の日大霧なり府城東門を出る、霧は少し霽れて城より大津に至る。老杉路を夾み森々列を成して、午後二重嶺を踰ゆ二重嶺は嶺高く峻しく、左右青草萋々（生い茂る）多く馬牛を放し、或は立つて或は眠り、或は乳或は草を嚙む、自から閑舒を得る畫に可し、嶺を踰えて下ること數十歩、流汗珠を成し熱さに堪えず、衣を脱して單衣を着て石に據りて臥す。

蘇山前に當りて白烟空に飄えるを臥してこれを見る。自から太上隱者の趣を有す、そこで紙筆を出して山を摸して去る。日夕（夕方）内牧犬塚某家に至りて宿る。某酒飯を設けて之れに侍らせる甚だ優なる酒間談に及びて近くの村民が一蟲蛇類を得る。四足にして爪重斷重齒、それ何物を為すか知る

莫<sup>な</sup>れ。或は曰<sup>い</sup>つ龍の子なりや、飲<sup>の</sup>み夜半に及び寝<sup>やす</sup>む。四日起きてみれば日は己<sup>おのれ</sup>に三竿<sup>さんかん</sup>（竿三つの高さ、八時頃）時に犬塚を辭して宮地に至る。途中雨に遇い阿蘇宮に及んで雨は止むも、雲未だ霽<sup>は</sup>れず祠前に鶏有りて、群を成し皆雄<sup>おす</sup>にして雌<sup>め</sup>雞來りて、ここに放せば皆化して雄<sup>おす</sup>に為すと云<sup>い</sup>ふ。神に謁<sup>えつ</sup>して宮司宅を過<sup>よぎ</sup>る。其の門扉は朽ちて頽<sup>な</sup>い柱は殆ど倒れんとしている。其の堂は至つて廣く。桐や楹<sup>のき</sup>撓<sup>はし</sup>扞<sup>たつ</sup>仄<sup>そく</sup>壁<sup>あへき</sup>（白壁）頽<sup>たい</sup>壊<sup>かい</sup>し、屋茅亦た處々<sup>おくぼう</sup>陷<sup>しよ</sup>凹<sup>しよ</sup>の上青松數十株を生ずるも、其の零落<sup>へいらく</sup>知る可<sup>べ</sup>し。扉を敲くと一老翁出で通<sup>と</sup>じ余を延いて坐し、坐定まりて奴茗<sup>やつめい</sup>（遅取りの茶）を捧<sup>た</sup>げて出で、少頃<sup>しやうく</sup>一人で待つと、兩函<sup>りやうかん</sup>を捧<sup>た</sup>げて來たり、これを几上<sup>きじやう</sup>に置き几下<sup>きか</sup>の苦<sup>くる</sup>に展<sup>ひ</sup>げて曰<sup>い</sup>ふ、觀<sup>かん</sup>れ、余苦<sup>くる</sup>に近<sup>ちか</sup>ずくと老翁<sup>らうおん</sup>は一函<sup>いつかん</sup>を開<sup>ひら</sup>く南朝以來<sup>なんちやう</sup>の詔宣<sup>しやうせん</sup>多く、中に後奈良帝宸翰<sup>ごならいでい しんかん</sup>と題する有<sup>あ</sup>りて、尤も高古<sup>かうこ</sup>のものは假名<sup>かな</sup>を以て、字體<sup>じたい</sup>は婀娜<sup>あな</sup>（しなやかで美しい）柔婉<sup>じゆうわん</sup>（素直で淑やか）極めて椒房<sup>しやうぼう</sup>妃嬪<sup>きひん</sup>の手を出で以て、帝が椒房<sup>しやうぼう</sup>に託<sup>たく</sup>す宮司<sup>みやうし</sup>の詔<sup>みことり</sup>なり。又一函<sup>いつかん</sup>を開くと將軍教書多く居<sup>しめ</sup>て、菊池大友<sup>きくちおおも</sup>心酬<sup>おつしやう</sup>の書亦た頗<sup>すこ</sup>る多く、又た足利尊氏<sup>あしかがたかうじ</sup>の髻文<sup>けいぶん</sup>と稱<sup>なづ</sup>くものあり。絹素方<sup>けんそ</sup>二寸細楷<sup>さいかい</sup>で書<sup>しよ</sup>は麗<sup>うめわ</sup>しくして辭<sup>じ</sup>は簡<sup>かん</sup>諸<sup>しよ</sup>髻<sup>けい</sup>中に密納<sup>みつな</sup>以來以て兵を募<sup>も</sup>り、其の餘<sup>と</sup>蠹<sup>しよ</sup>書<sup>じゆ</sup>充棟<sup>ちゆうとう</sup>（虫の喰つた書物が沢山ある）寓目<sup>いうもく</sup>（注目して読む）に違<sup>ちが</sup>ず。（時間と暇がない）

余は寶刀ほうたうを觀るを請うと、天陰てんいんの時は觀るを禁ず。晴を待て可しと云つので、辭じして宮地の旅舎に宿る。五日大雨なり蘇山に登るを得ず、又寶刀ほうたうを觀るをことも得ず、雨に坐して岑寂しんじやく殊に甚だしく、某々は曰う晴れを期す可らず、吾れ矢部に趣き辭去じして、仁郷に留まりて晴れを待つ、午後酒を命じて相對して句覓くへきして夕に至り雨は止む、六日晴れて寶刀ほうたうを觀る。刀の長さ三尺三寸五分柄に入る處一尺一寸奇有り、廣さ一寸余り厚さ三分餘り左右に刀形を鑤ちりばめてあり、下の柄に入る處の半ばを起す上に鋒一寸距へだてて至る。又刀形一分を距てて、刀形を循りて一小渠を鑤り右旁に梵字一劔一鑤ほり、左旁に護摩しまの如くの鑤ほりが二つ、長さ三寸ばかり柄に入る一分ばかり、刀質紫色を帯びて刀は白くして、刃文蕨芽じんもんの如く鋒きつさきより下四寸ばかり刃が小さく欠け相傳う。其の先は惟澄これすみが之れを戰に用い、勇を奮い大戰し刃缺は數處、これを多々良の戰に用い、少頃して螢が來り缺し處に止る有るを見る。異にして扇を擧げて之れを撲うつ、一螢手に隨したがいて地に墮おつ、之れを視て乃ち刃の缺は、皆合す故の如く是れを由に螢の名を得て或るは曰う。其の墮おちて地に在るは熒々けいけい（光り輝く）螢の如く故に名す。其の柄に入る處の銘に、永仁五年三月一日來國俊實希有神物なり。

觀て辭して去りて防中を過ぎ、山内の某を訪う、某は鷄卵を煮て酒を暖め、飯を炊く之れを食す、食して蘇山に登る。山に黃精（藥草）に續き随いて子獨活（山うど）多く、其の他異弁奇草路を挟んで生じ、余本草（藥草）に朦く尽く知るに能はず、山に復た硯と呼ぶ石有りて、長さ六尺廣く之れ稱すべし。上に一孔有り硯の如く、又皿と呼ぶ有るを聞く、状は皿に似ている、一老夫に逢い其の在る所を問うと、既に之れを過ぎていと云う。忽ち（次第に）見る四山俄頃（俄に、急に）雲起りて、蓊々然（盛んに）と脚下に至る。余は笑つて仁郷に謂う、我子（我と君）と共に白雲に登り仙人かな。相顧みて笑う、本堂に至りてみれば日は已に西昃（西に傾く）堂下茶店有り、店主余に近ずきて、此れより以上國法で西後の登攀することを禁ず、曰うので下りて湯谷に趣く、路は山背を行くも。人跡は絶えて無く日は已に暮れ、凄然神悲しく忽として、空際に攄然（物が割れたり裂けるような音）の聲有るを聞く驚き視れば怪禽有り。頑（かたくな）に空中に頑（飛び上がる）須叟（少しの間）裊霄（空に飛ぶ）して去る、路旁に獨活有り極めて肥大共に之れを抜き數莖を得て一廣豁（廣い所）の處に至る。牛馬を多く放してる、仁郷は人家が近しと曰う、數十歩行くと果せるかな黃茅（藁葺きの家）數屋有り、溪底に有り即ち湯谷なり。谷に温泉が出る。浴する者は

頗る多く、余は宿を乞つ、主人は引いて一茅樓に至り、飯羹（飯と汁）を進んぜるも焦げ臭く食せず。樓屋の壊れ破壁に座して星辰を見る。溪風坐に入りて寒さ甚だしく、そこで酒を沽い得たる所の獨活を切つて、酢に和して之れを食す。味は甚だ香り美しく飲んで睡りに就く、夜半酒醒めて夢に驚く、杜鵑（不如歸）の聲屋を繞りて已せず（絶望）。卿思（二人で思ふ）泉湧複た寝るに能はず。耿耿（安らかならず）として曙に達す。七日早晨再び阿蘇に登る。是の日大霧山に罩る、纔かに蹊路を辨て、時己に本堂に至る。霧漸く霽れて堂より上の山に一草も生せず。石は皆焦赭（焼けた）行くこと數百歩霧復た起りて、御池に至るに及び霧は愈よ深く、忽ち（漸く）人語近くに在るを聞くも、其の人を見ずして少頃して二老夫來るを見る。甲は乙に語り曰う「吾れ此れに登るは數なり、池中五色の水現れ或は沸き、或は躍り或は燃え或は烟りを生じて、或は聲を發して雷の如く、今日は霧深く昏くて見えずに憾む可し」と言ひ訖えて下りゆく、余も亦た下りて茶店に至り午飯を喫す。霧は忽ち霽れて又た上る、霧は又た生じて然るに甚だは深くせず、髣髴（ぼんやりと）池水を辨ける水深くして測れず、周廻すること一里ばかり、絶壁万仞之れに臨み神悸れて股栗（怖さで肌に粟が生じる）若し一つ足を失すれば、生きて焦熱の地獄に墮つ、

眞に懼る可し。余は再び登りて五色の水を見るをまた能はず（出来ず）そこで一詩を賦して下る。十數歩をして霧は復た霽れて、顧り見ると白烟池上に生ず、油々然（水が緩やかに）なり。余は仁郷に謂う「雲霧變幻常ならず亦た太さ甚だし」と高く貧交行（杜甫の詩）を吟じて下る。路は本堂右に取る路甚だ険しく、未時（午後二時前後）一温泉に至る。地獄を名し浴者極めて多く、余亦た浴して温泉を上りて數十歩大屋八九有り。鐵釜數百を設けて煎礬（明礬作り）余二つの大礬（大きな石の塊）を乞い得て、屋上の岩石間の到る所から烟りの噴く、蒸に就いて之れを視る、硫黄の氣薰蒸して上る、熱く近づく可らず、硫氣石に着いて黄色を成す。石の旁ら硫黄多く拾つて、溪流に嗽いで味をみる酸渋く、礬氣（硫黄を含む）を帶びて飲む可らず。温泉の旁らに茅屋有りてそこで往の宿、八日天氣晴れて地獄を發つ、道は其の右に取りて、滴珠に至ると亦た温泉有り。茅屋四五間溪間に在り小瀑布（滝）有り、林木の間に懸りて嵒然として鳴る、清涼掬む可し、黒川に至り石缸を過ぎ、數十歩行くとまた瀑布有り。名して數鹿流と曰う、絶壁蒼崖左右相圍み上に樹木有り、鬱然と叢生し瀑布其の間に懸る。霏々（雨や雪が激しく降るさま）雪を噴き、其の聲雷の如く轟轟然として下り、漚（滝壺）は碧潭を成し濺沫（泡や飛沫）散じて亂れ白碧相映

じて奇（美）なり、余樹陰に至り草を藉にして坐し、腰間に挿してある龍笛を取りて之れを弄ぶ、  
聲は林木に震えて響き蒼崖を破りて、瀑布に相和して淵龍の如く一吟雷起り曲に奔り闌む、去るを  
忍びず憩うは之れ久しく、午後大津に至り蕎麦麵を喫して濁酒を飲み、驛を出て顧り來た路を見れ  
ば、蘇山を見るも杉の間に隠れ依々（離れ難く）余を送るが如し。余亦た縋々（憩ろに）筇を駐めて之れを指  
して仁郷に謂う。我は子（仁郷のこと）ともに、昨日遊ぶ所を今髣髴として天際を見た。我子とともに各千里  
の異郷の人で此のような遊は再び有るだろうか、我子とともに各其の國に歸り間居獨處の時、此の遊  
びを憶い起し、蘇山千里君千里、我亦た千里（千里は極めて遠いの意）我れ君を見たいと思うが復た見るこ  
はできまい。君も我を見たいと思うても復た見ることはできまい。我子とともに蘇山をたいと思うな  
ら、その時に當り其の感慨はどうだろうか、昔羊叔子は常に硯山に遊び百姓碑を建てるを為す。皆  
涙を墮とすを望む、今我子と此の遊ぶを常には可とせずと雖も、亦た將に此の遊びをせんとす記して  
以て君に示す。君郷に歸りての後に吾れに記して之れに對して展られよう。昔遊復た可とせずを悲し  
み、少年の夢の若く感ず老の將に至らんことを歎き、淚潸然將にこれ墮ちる。「翅の墮つ涙に碑す

る己おのれかな」遂に蘇山に遊ぶを作すを記し以て仁郷に示す。

時戊午ぼし四月八日

## 語釈

蘇山に遊ぶ記 阿蘇山に登るの記。後州 肥後。崇山 宗教的な山、信仰の山。峻嶺 峻しく高い山や嶺。阿蘇 阿蘇山。熊城 熊本城。

下、市街。六十里 ここでは周里一里六丁、日本里は一里三十六丁、故に約十里、約四十キロのこと。蓋 思うに、なんぞ。硫黄 火山地帯に産する

黄色の鉱物。白烟 白い煙り。烟 煙り。祠廟 神を祀る祠、廟。廣大 広くて大きい。彫鏤 金属に彫刻したもの。精緻 精密で緻密。健盤龍命 健甕龍命

安蘇神社の祭神、神武天皇の孫。祀る 祭る。祠司者 神官。大宮祠 神官、宮司。速瓶玉命 宮司の祖先。崇仁の時 崇神天皇の頃。國造 國造

上代、一国を統治した、世襲の地方長官。世掌 世襲。雄長 雄者で長者。古帝王詔宣 古代の天皇の詔書。古名將 古くからの名將。書牘 文書、

書き物、札書。寶刀藏す 一振りの名刀、宝刀を所蔵。螢丸と號す 宝刀の名。謀り 諮り、相談。諾 承諾。戊午 安政五年、一八五八。霽 晴れ、

雨が上がる。森々 森林然と。踰 越える。嶮 嶮しい。茸々然 草木が青々と茂るさま。閑舒 ゆつたりと、遅い、のろい。單衣 單衣、浴衣。

を着る。據り 縋る、寄り掛かる。臥 横臥、寝る。飄 飄然、漂う。太上 最も優れていりこと、最上。三皇五帝の最も優れた時代、上皇。隱者 隠者

世を避けて隠れている人、世の中を見捨てた者、隱士、仙人。蟲蛇類 は虫類、蛇。重斬 上下の歯茎。重齒 上下の歯。莫れ ない、しては成らな

い。龍子 龍の子。日已に三竿矣 日はもう竿三本もの高さに昇る。皆雄 皆雄。雌雄 雌の鶏。神に謁 神に拝謁、詣でる。畢終 畢終、遂に、悉く。

柱頰 長い柱。桐 軒、庇、まぐさ。楹 丸く太い柱。撓 撓む、曲げる、曲がる、撓める。仄 傾く、傍ら、側、仄か、微か。望壁 白土の壁。類 類

剥げ落ちる、崩れ落ちる。屋茅 屋根の茅。亦處々 所々。陷凹 落ち凹み。零落 凋落。敲 叩く、ノック。延坐 延坐座敷の下座に座る。坐定り 座席が

決まり。奴 小僧。茗 茶、遅く採った茶。兩函 二つの箱。几上 床几の上。几下 床几の下。苦 苦、苦筵、敷物。展 展示、広げて見せる。

一函＝一つの箱 南朝＝後醍醐天皇の一三三三より一三九二 詔宣＝天子の命令 後奈良帝＝一五二六 宸翰＝天子の宸筆、真筆、文書、手紙 高古  
 最も古い 書假名以て＝仮名文字で書いてある 字體＝字体 形 婀娜＝女の姿のしなやかな美しいさま、ゆつたりとした上品なさま 辭＝言葉 柔婉  
 素直で淑やかなさま 椒房＝皇后の御殿、転じて皇后 山椒は暖気と良い匂いをあたえた実を多く結ぶので、子孫が多くなると言う意味で、御殿  
 の壁に塗り込んだという 妃嬪＝妃、天子に仕える女官 蓋＝思うに、確か 託＝委託、頼む 詔＝詔書 菊池＝菊池武敏、武重、没後弟の武士  
 が幼少で継いだ 大友＝氏時と貞順 応酬＝人に応対する、人から来た手紙に返事を書く 頗る＝頻繁に、とても 足利尊氏＝室町幕府を起こした初  
 代將軍、後醍醐天皇を後に隠岐に流し南北朝の争いを起こした 髻文＝もとどり、たぶさ、みずらを添えた起請文 絹素＝白絹 書細格＝細かい楷書  
 書麗＝文字が綺麗 辭簡＝言葉が簡素、簡單 密に＝内密に 諸髻＝諸々の髻、たぶさ 募る＝募集 蠶書＝書物が虫に喰われる 充棟＝棟に充ち  
 る、建物に一杯に 寓目＝目をつける、注目、囑目 遑＝忙しい、慌ただし、い急ぐ 寶刀＝名刀、宝刀 天陰＝日陰、曇り 辭去＝辞去 岑寂＝深  
 山の静寂 句覓＝詩人が苦心して良い句を探し求めること 鑊＝刀の彫刻 鋒距＝切つ先までの長さ 循＝巡る、したがう 小渠鑊＝小さな溝状の彫  
 刻 梵字＝古代インドの文字 護摩＝焼く、意、真言宗に秘法の一つ、火を焚いて佛に祈り、一切の煩惱、悪業を焼き払う行事 蕨芽＝蕨の芽 惟澄  
 阿蘇神社の神官阿蘇氏は惣領惟時と弟の惟澄とが争っていた 多々良＝多々良浜の戦い、福岡市箱崎付近で、尊氏と九州最大の後醍醐党との戦い 撲  
 る＝叩く、払う、殴る 随い＝従う、沿って 熒々＝光り輝くさま、つやつやしたさま、千紗名光のさま 墮る＝落ちる 來國俊＝名刀工 畢＝終わ  
 り、悉く 黃精＝薬草の名 子獨活＝小さな独活 異弁＝変わった花弁 奇草＝珍しく不思議な草 朦朧＝暗い、おぼろ、月の光がぼんやりと 四山＝四  
 方の山、四国の山 俄＝急に 蒹葭然＝草木が茂るさま 西晨＝日が西に傾く 夕陽 西後＝今の午後六時以後 登攀＝登り攀がる 凄然＝寒く厳し  
 いさま、物寂しく傷ましいさま 神悲＝神秘、人知ではかり知れないような不思議なこと 空際＝空の果て 攄然 境界を付けたように、ハッキリ  
 と 怪禽＝怪鳥 頑＝目鼻だちがハッキリしない、頑丈な 空中＝空の中程 韻＝鳥が飛び上がる、乱れる、真つ直ぐな首筋 須臾＝少しの間、暫く  
 擗霄＝雲を駆け飛び回る 路旁＝道ばた 獨活＝独活 肥大＝大きく太って 廣豁＝広々と開けた所 黃茅＝黄色な茅 数屋＝数戸、数軒 溪底＝谷

底、茅樓ぼうろう、茅葺きぼうきの家。飯羹はんかん、ご飯と肉と野菜を混ぜ煮た吸い物。樓屋ろうおく、家の屋根。星辰せいしん、星や月。溪風けいふう、谷の風。  
 沽酒こしゅ、買った酒。香美かうび、良い香りと美味。醒めさめ、醒める。杜鵑とくわん、ホトトギス。繞りめぐ、巡る。まどろ、かこむ。卿きやう、故郷。里り、耿々こうこう、光輝くさま、明るい、心が安らかでない。曙あけぼの、夜明け。早晨そうぜん、朝早く。罩とま、籠、魚を捕る竹籠、網をかける。覆さい、僅か、少し、稍。蹊路けいろ、小道、近道。漸くようや、やつと。霽せい、晴れる。焦緒しょうじゅ、赤く焦げる。愈ゆ、いよいよ。烟けむり、煙り。憾かん、憾ず、残念、遺憾。訖きつ、終わる、終える、止める、遂に。午飯ごはん、昼飯。喫き、食べる。髣髴ほうふつ、さながら、良く似たさま、仄か、ハッキリしないさま。池水ちすい、池の水。辨わ、判る。絶壁ぜつぺき、切り立った断崖。万仞ばんぜん、一万尋、尋は八尺、約二、四米。神悸しんき、神を畏れ、心臓がドキドキする、胸騒ぎ。股栗こつ、足が震えおののく。懼おそれる、懼れる、おそれる。焦熱しょうねつ、熱く焦げる。地獄じごく、罪惡を犯した者が死後に行つて種々の苦しみを受ける所。墮お、落ちる。白烟はくえん、白い煙り。油々然ゆゆぜん、水や雲が緩やかに流れるさま。變幻へんげん、幻のように、忽ち現れ忽ち消えること、変化の早いこと。貧交ひんかう、僅かな交わり。高吟かういん、声高らかに吟じる。未時みじ、今の午後二時頃。鐵釜てつぽ、鉄の釜。礬ばん、硫酸を含んだ鉱物、綠礬、明礬、染料や薬品にする。煎せん、煎じる、煮詰める。兩大礪りやうだいがい、両手で抱える大ききの塊。處々しょしょ、所々。烟けむり、煙り。噴ふん、噴く。硫氣りゅうき、硫黄の氣。硫黃いりやう、火山地帯に産する黄色の鉱物。薰蒸くんじやう、燻し蒸す。嗽しやう、うがい。礬氣ばんき、硫酸を含んだ空氣。茅屋ぼうおく、茅葺きの家。滴珠てきしゆ、滴が玉のよう。溪間けいかん、谷間。小瀑布しょうばくふ、小さな滝。懸かか、懸崖のように流れ落ちる。嵒然せうぜん、清涼せいりやう、清く涼しく。掬く、掬う、推量。石缸せきかう、石橋、水中に置いた飛び石。瀑布ばくふ、滝。數鹿流すうらくりゅう、滝の名。絶壁ぜつぺき、断崖、切り立った壁。蒼崖そうがい、青い崖。匯わい、水が巡り集まる。碧潭へきたん、青い淵。濺沫せんまつ、飛沫を注ぐ、水をさつと振りかける。轟轟然こうこうぜん、車が音を立てて走るさま、凄いだきな音。鬱然うつぜん、草木の茂るさま、氣の塞がるさま。叢生そうせい、草が群がり生える。霏々ひひ、雨や雪の激しく降るさま。白碧はくへき、白と青。相映あひあ、互いに調和して映える。樹陰じゆいん、木陰。藉草せきそう、草で編んだ敷物。腰間ようかん、腰に、帯に。龍笛りゅうてき、龍笛。弄ろう、弄す、吹く。瀑布ばくふ、瀑布の音。相和あいわ、調和する。淵龍えんりゅう、淵に棲む龍。一吟いちいん、一つ吟じる。雷奔らいほん、雷が走る。曲閑きよくかん、曲の終わり、止む。蕎麦そば、蕎麦。麵めん、麵類。濁酒だくしゅ、白酒、濾して無い酒。縋々けんけん、まとわりつく、捲く、丸めて縫つ。節駐せつち、杖を止めて。節せふ、杖にする竹。天際てんさい、天の果て。千里せんり、遠い所の意、人名。異鄉いしやう、故郷がそれぞれ異なる。豈あた、どうして、なんと。感慨かんがい、深く感じて心が古い立ったり、嘆いたりする、感動して憤激する。何如いか、いかが、

どんな。羊叔子<sup>ようしゆくし</sup>。硯山<sup>けんざん</sup>。硯石の山。遊<sup>ゆう</sup>。登る、行く。百姓<sup>ひやくしやう</sup>。農民。碑<sup>ひ</sup>。立石、日陰によって時間を計るための石柱、宗廟に建てかけ生け簀を繫ぐ。石柱、いしぶみ、故人の事跡を称えて後世に伝えるために文章を彫りつけた石。雖<sup>いえども</sup>。けれども、たとい。潜然<sup>さんぜん</sup>。心を深く潜める。翅<sup>し</sup>。ただ、翼、羽。戊午<sup>ぼし</sup>。安政五年、一八五八。仁郷<sup>じんかう</sup>。五竹の友人。

20 雲仙岳紀行

温泉為岳。鎮西巨鎮也。山上冰雪常在焉。其高可知。戊午夏。余在熊府。與天草岳吉甫語。及温泉吉甫曰。僕家隔海對岳。春靄秋月。朝烟暮靄。奇態難狀。尤與冬日觀雪為宜。方雪霽雲散。玉山突出蒼海中。宛乎望天仙于霄漢。未嘗不神往焉。常欲躋攀以探其幽秘。而未果。足下豈有意乎。於是與吉甫謀。以六月十二日。買舟於高橋。航島原。舟中望雲仙烟並浩蕩中。已覺其有異。此夜月色晴朗。雲仙立金波閃爍中。殊為奇觀。夜半驟雨。十三日大雨。舟達森城。宿高某家。十四日。入江置酒招余。痛飲及晚。相携步月眉山下。眉山即雲仙山脉。東奔峙於森城者。清秀蒼鬱。風景可掬。十五日晴。邂逅島原助教某訓導某於洵美亭。對酒言詠。及晚而去。十六日晴。朝發森城。訪三室里正篁墩。十七日晴。伊藤千里觴余其亭。千里聞余登温泉。謂余曰。僕近家事鞅掌。經數日。則得閑。欲為導者。肯留不。余曰。然則幸甚。遂宿焉。十八日晴。十九日晴。過篁墩千里。訪觀水亭。廿日晴。訪森山里正雨香。酌酒賦詩。及夜而去。宿觀水亭。廿一日。朝小雨。廿二日陰。過篁墩。廿三日雨。會于挹芬堂。廿四日晴。廿五日晴。廿六日晴。與千里及其門人文哉。鷄鳴發三室。味爽至森山。見一山前橫。是為九千部。昔有一僧。學禪未省。誓曰。

登此山。讀經至一萬部。而後不得道。乃還俗耳。至九千部。有省。因名焉。取路其右。過松尾。經千々石。午時。至一酒店。喫所齋搏飯。食畢。而行數百步。山蹊頗嶮。炎日如燬。流汗透衣。一步一喘。十步一憩。未時。至一乘院。々空海所勸也。寺旁有号地獄者。倩難僧導之。既而至一処。地中噴烟。硫氣撲鼻。僧指曰。是為清七地獄。昔有清七者。墮之而死。進十步。得一石碁。曰三途大河無明橋。過碁十數武。逢山石磊々如劒戟。曰是号劍山。々下有池。其色如藍。為染戸地獄。如酒。為酒家地獄。如酢。為酢舖地獄。為不孝地獄焉。有閼牆地獄焉。閼牆比諸不孝。烟勢熾甚。余乃笑曰。不弟之罪。何甚於不孝耶。相顧輒然。又有姦夫地獄。烟勢更甚。千里戲僧曰。姦淫之罪。何甚於不孝耶。僧曰。君其問阿闍梨。其他。八萬地獄。雀地獄。殺生地獄。難產地獄。妄語地獄等。種々為名目。觀畢。投寺旁客舍。々前有温泉。浴罷呼杯。主人取酒瓶。浸温泉中。不煩薪火。而酒自暖矣。各傾數杯而寢。廿七日晴。倩一導者。登普賢岳。取路客舍左。穿林而下。有平地。曰池原。經夫婦石下。進數百步。山路峴路。旁多異卉奇草。落英繽紛。進至山肩。暫憩。下臨不測深谿。導者取巨石轉之。草卉被摩。窄々而下。遙而無聲。唯見如飛蝶而已。少陵云。轉石驚魑魅。非虛語也。路循溪而右。々俯深溪。左則十丈怪巖。簇々欲仆。神悸目眩。運足極遲。進數里。路愈嶮惡。渴甚。路旁異草。午時猶有露。乃就寢舐之。甘香徹心肺。既而逢一大巖。屹立如門。長可十丈。

呼為鬼門。過其左。登數十步。地稍平。無草木。又十數武。路甚小。狀如馬鬣。左右皆溪。股栗難前。又進數十步。得坦地。有一石竈。安普賢菩薩像。竈後。蒼崖如屏風。号風巖。高十丈許。上生茂樹。鬱蒼然。旁有小樹懸焉。樹皆露根。泉自石罅出。過石角木根。滴々而下。受以一石泓。余輩渴甚。就泓更飲。殆盡。乃踞巖下。出糧食之。且食望一目千里。九州可摩。忽見山腹生雲。遙々粘海而飛。不知其所之。天飆吹衣。飄々欲仙。有鶯鳴幽谷中。如聞仙樂。使人不忍去。導者促曰。遠路且嶮。難久息。行數里。至冰谷。深林陰森。不見日色。清涼徹骨。導者指一石窟曰。此窟有冰。四時不消。近歲土人夏日取水鬻之。三四日前猶有焉。恨客來少晚也。余輩以為或存片塊。入窟索之。無有。寒氣透膚。遍身生粟。不可久留。乃出而去。愈進。樹逾茂。老幹古藤橫路屈曲榉材。蟠根縱橫。如龍爪攫石而起。怪石詭巖。磊砢塞路。如夜叉角。如象之牙。如虬。如螭。如虎豹。蹲踞岩頭。出木股。行數十步。青茅塞谿。其深及肩。行人唯見頭。余戲曰。諸君為飛頭蠻乎。數百步。至鬼神谷。々々多老槐。鬱然遮天。進數十步。一風穴。徑可一尺。余輩。更風于穴。冷甚。又行數十武。路右有峯。号國觀岳。上載石筍。長十丈許。導者曰。此岳有天狗。棲焉。登則失人。又曰。自此行數十步。路極嶮惡。如登天。称曰親跡。攀葛。躡岩。喘々然而上者。數十步。漸至頂。々々有茂林。々々盡海見。導者曰。是皺洋也。布帆點白。如鷺。風景可掬。因坐頂上。眺者久之。空氣清

爽。如八九月候。紅日可摘。而不煩扇笠。又行數十步。得妙見岳。上有妙見像。下則又至池原。午時歸客舍。洗脚於溫泉。被襟而臥。有異蟲。鳴于屋後松林中。其聲清涼可喜。余奇而問之主人。主人曰。土人呼寒々蟬。以聲得名。又蟬屬獨此山有焉。廿八日午後。衝雨下山。迂途。觀鮎返瀑布。昏黑至有馬里正高木某家。某沽酒擊鮮侍之。飲畢就睡。廿九日雨。晦日雨。朝與千里文哉別。余自遊鎮西。得三勝區。曰阿蘇。曰海中道。曰溫岳。阿蘇高則高矣。然無幽邃之趣。海中道平而遠。清而麗。譬如幼妙處女。難與十尺壯夫並論。獨溫岳高秀。幽而深。仙藥生焉。嘉樹茂焉。宜脩長生。宜為肥遯。故會心不在彼。而在此。噫。古之君子。用則行。舍則藏。許由隱于箕山。伯夷陰于首陽。伯陽隱于會稽。四皓陰于商山。謝安于東山。思邈于太白山。圖南于華岳。朱栲亭于武夷。或守道。或脩仙。其清潔高尚何如哉。余也。世辱微祿。上不能裨益於世。下不能決然引去。對溫山。徒有慚愧耳。今欲與溫山別。豈無懸々乎懷哉。詳記諸經光景。傷溫山之不可復見也。

## 釈文

雲仙岳紀行  
うんぜんだけ きこう

温泉岳を為す鎮西（九州の古名）の巨鎮なり。山上の氷雪は常に在りて其の高さを知る可し。戊午の夏

温泉岳を為す鎮西（九州の古名）の巨鎮なり。山上の氷雪は常に在りて其の高さを知る可し。戊午の夏

余は熊府に在りて天草岳甫吉と語り。温岳に及び吉甫は曰う、僕家は海を隔てて岳に對し、春靄秋月

朝烟暮霞と奇態（美しさ）は述べ難く尤も冬日雪を觀るに宜しく、雪霽れて雲散じて宜しく方に玉山

（雲仙岳）蒼海の中に突き出る。玉山は宛ら天仙千霄漢を望む（天に昇った仙人が空から見ようだちういみ）未だ嘗

て神も住まず常に幽秘深く、躋攀せんとすると未だ果せず、足下（貴殿）と登ろうではないかと云う。

是れに吉甫某しと謀り、六月十二日高橋に於て舟を買めて島原に航る。舟中から雲仙の烟浪浩蕩を

望む、己に其の異なること有するを覺える。此の夜月色晴朗雲仙金波（光り輝く）の中に立ち、殊に奇

觀（立派な眺め）を為す。夜半驟雨（俄か雨 激しい雨）となる、十三日は大雨となるも舟は森城に達し、高某家

に宿る。

十四日は入江某し余を招き酒を置し。痛飲晩に及び相携えて月に眉山の下を歩く。眉山即ち雲仙山脉

東に奔り森城より峙つ、清秀蒼鬱（青々とこんもり茂る）の風景は掬う可し。（両手で掬いあげたい）十五日晴れ

島原助教某しと訓導某しと洵美亭で邂逅（逢う）する。酒に對して言詠晩に及んで去る。

十六日晴れ、朝に森城を發つて三室里の正簞墩を訪ねる。十七日晴れ、余伊藤千里と其の亭に觴（酒を酌む）す。千里余に温山に登ることを聞き、僕近家事鞅掌（仕事が多い）のため數日を経て則ち閑を得て

導者（道案内）を為さんと欲す。肯（あ）えて留めず余は曰う、然り則ち幸甚なりと遂に宿る。

十八日晴れ、十九日晴れ、簞墩の千里を過ぎりて觀水亭を訪ねる。廿日晴れ、森山里の正雨香を訪ね

て、酒を酌み詩を賦して、夜に及んで去つて觀水亭に宿る。廿一日朝小雨、廿二日陰り、簞墩を過る。

廿三日雨千挹芬堂にて會う、廿四日晴、廿五日晴、廿六日晴、千里及び其の門人文哉と與鷄鳴三室を

發つて味爽森山に至る。一山前横を見る、是れ九千部を為し、昔一僧が有りて、禪を學び未だ省かず

誓つて曰う、此の山に登る經を讀むこと一萬部に至る。後に道を得ずそこで還た俗に九千部に至る。

省みるに有りて名に因りて、路は其の右を取り松尾を過ぎ、千々石を経て午時一酒店に至り、齋所搏飯

を喫す（持って来た握り飯をたべる）。食畢りて行くこと數百歩山蹊頗る嶮しく、炎日燂くが如く汗は流れて衣

を透す。一步一喘、十步一憩、未時(午後二時頃)一乘院に至る。院空海翔の所なり。寺の旁らに地獄と号ぶところ有り。雖僧は離れてこれに導きゆく、一処地中烟を噴いて硫氣鼻を撲つ、僧は指して曰う是れ清七地獄と為す。昔清七有りて之れに墮ちて死す。十歩進んで一石砦(水中の飛び石)を得る。三途大河無明橋と曰う、砦五歩過ぎる十數歩、山石磊々(石や岩がごろごろと)劔戟の如くに逢う。曰う是れ劔山と号ぶ、山下に池が有り、其の色は藍の如く染戸地獄を為す。酒の如く酒家地獄を為す。酢の如く酢舗地獄を為す。不孝地獄有り。閼牆地獄有り。閼牆不孝諸に比べ、烟勢熾なること甚だし。余そこで笑い曰う不悌(兄や目上の人に従わない)の罪何んぞ甚だしきは不孝よりかな。相顧りみて輒然たり又た姦夫地獄有り。烟勢更に甚だしく、千里僧に戯れて曰う、姦淫の罪は何んぞ不孝より、何んぞ甚だしきかと僧は曰う、君其れは阿闍梨に問えと。其の他八萬地獄、雀地獄、殺生地獄、難產地獄、妄語地獄等種々名目を為すを觀畢りて、寺の旁らの客舎に投ず。舎前に温泉有りて浴し罷んで杯を呼ぶ、主人酒瓶を取りて、温泉の中に浸して薪火を煩せずして、酒は自から暖まる。各數杯を頤にして寝る。廿七日晴れ一導は、つずいて普賢岳に登る。路は客舎の左を取りて、林を穿つて下れば平地がなる池

原と曰う、夫婦石の下を経て數百歩進むと山路は崎嶇（山路の険しいこと）なり。路旁に異弁奇草多く、落英  
繽紛（花びらが盛んに散る）の中を進んで山肩に至りて暫く憩う。下を臨ると谿は深く不測を恐れる。導者巨石  
を取り之れを轉して、草弁を披靡（草を靡く伏す）して罕々（落ちつかない）として下る。遙かして聲無く唯だ  
飛蝶の如くに見える、己に少陵（杜甫）石を轉して魑魅（山や沼にいる化け物人面獸身で人を迷わせる）に驚くは虚語  
に非らず。路は溪を循りて右に左に深い谿に俯せて左を見れば十丈の怪巖が簇々（群がり集まる）として仆  
れんとしている。神悸目眩（心怖れて眼が眩む）足の運びは極めて遅くなり、數里を進みて路は、愈よ嶮惡  
になり渴き甚しく、路旁の異草は午時猶お露有りて、そこで之れを舐める、甘香心肺に徹る。既に二  
大巖に逢う、屹つこと門を立てたる如く、長く十丈ばかり呼んで鬼門と為す。其の左を過ぎて、數  
十歩登ると稍平地となり草木は無く、又十數武（武は半歩）進むと路は甚だ小さく、状は馬鬣（馬の鬣）  
の如く左右皆深で、股栗前み難し。又進む數十歩にして坦地（平地）を得る。一石龕有り、普賢菩薩像  
を安んじる、龕後は蒼崖の如く屏風巖と号ぶ、高さ十丈許り上に茂樹生じて、鬱蒼然として旁に小樹  
懸りてあり、樹は皆根に露泉石罅（石の割れ目隙間）より出ずる。石角木根を過ぎ滴々（滴が滴り落ちる）落ちる

を受けて一石の泓いっせき おうにおいて、余輩よはいの渴かわくこと甚おつしく泓おつにおいて飲むこと盡かんきず、そこで巖下がんかに踞すくまりて糧かてを出し之れを食べる。且つ食べる一目千里望みて、九州を摩さんぶくすばかり忽ち山腹に雲が生ずるを見る。遙々海に粘りついて飛ぶ、いつの間やら天飊てんびやう（天に吹きささぶ大風）は衣を吹いて飄々仙にならんとする。鶯うぐいすが幽谷ゆうくの中に鳴き仙樂せんがく（仙人の音楽）を聞くが如し。人を使って去るに忍びずも導者は促うながす。遠路且つ嶮えんろしく久しく息も難しと云う、行くこと數里氷谷に至る。深林陰森は日色にっしょくを見ず、清涼は骨に徹とある。導者一石窟を指して此の窟に氷が有ると云う。四時しじ（一年中）ず。近歳土人が夏日氷を取りて鬻ひさぎ（売る）之れ三四日前のもの猶おに有りつて、恨客來たるも少晩きなり。余輩も片塊へんかいを為さんと窟に入りて之れを索さがす。有るは無し。寒氣膚かんきはだに透る遍身粟を生じて久しく留ることならず。そこで出て去り愈いよいよ進む。樹は逾いよいよ茂り老幹古藤が路横ろおうにありて屈曲くつきよく榲材さが（細かく角張つて）蟠根はんこん（根が蟠つて）は縦横じゅうおうにして、龍爪りゅうさの如く石を攫つかんで起つ。怪石詭巖磊磊かいせき きがんないらい（石や岩がごろごろと）と路を塞ふさぎ、夜又角の如く象の牙の如く、虬きゆうの如く螭みずちの如く、虎豹こひょうの如し。岩頭がんとうを蹲しゃがみ躡ふみつけて木股きまたをて、行くこと數十歩にして青茅せいちが谿たにを塞ふさぐ、其の深さ肩に及ぶ、行人の唯だ頭を見る、余戯れて曰う諸君の飛頭蠻ひとうばんを為すと、數百歩

で鬼神谷に至る。谷には老槐多く鬱然として天を遮ぎる。進むこと數十歩一風穴あり、徑は一尺ばかり余輩更に穴風甚だ冷たく、又行く數十武路の右に峯有り。國觀岳と号ぶ、上には石筍を載く石筍の長さ十丈許り、導者は曰う、此の岳は天狗を有して棲む。登りて先人を失う、又曰う此れより行くこと數十歩は、路極めて嶮惡で天に登るが如し。称す親跡葛を攀りて岩を躡みつけて、喘々（呼吸が途絶えがちになる）として上ること數十歩漸く頂に至る。頂に茂林有林盡きて海を見る。導者曰う是れ皺洋なり。布帆點々と白く鷺の如く、風景掬む可し因つて頂上に坐して、眺るは之れ久しく、空氣清爽八九月の候の如く紅日（太陽）摘む可し。扇笠を煩わせず又行くこと數十歩妙見岳を得る。上に妙見像有りて下は池原に至る。午時客舎に歸えりて脚を温泉に洗い、襟を被つて臥す。異蟲有りて屋後の松林の中に鳴く、其の聲清涼にして喜ぶばかり、余奇なりとして之れを主人に問う。主人曰う土人（土地の人）は寒々蟬と呼ぶ、名を得て聲を以て又蟬屬して獨り此の山に有り。

廿八日午後は雨を衝いて山を下る、途を迂りて鮎返し瀑布を觀る。昏黒有馬の里高木某し家に至り、某し酒を沽（かう）い鮮を撃して之れに侍る。飲み畢て睡りに就く。

廿九日は雨、晦日も雨、朝千里文哉と別れて余鎮西に遊ぶ。三勝区を得て曰く阿蘇曰く海中道曰く温岳  
あそ 阿蘇高く則ち高い。然れど幽邃ゆうすい（静かで奥深い）の趣は無し。海中道は平らかにして遠く、清く麗しく譬  
やうみようしよじよ と幼妙處女の如く、十尺の丈夫並論するは難し。獨り温岳は高く秀幽しゅうゆうにして深く、仙藥生じて嘉樹  
よう 茂脩宜しく肥遯ひとん（俗世を離れる）を為す。故に會心彼在せずしてここに在り。噫おも。古の君子は用を  
 行い、舍則ち藏すして許由きょゆう（中国伝説の隱者）は箕山に隠れ、伯夷はくゐ（舜の時代の人）は首陽に陰れ、伯陽は會稽に  
こいつ 隠れ、四皓しごここに商山に隠れる。謝安しゃあん（晋の名臣）は東山に隠れ、思邈しはくは太白山圖南華岳に、朱栲亭は  
せいけつこうしやう 武夷或は守道或は脩仙、其の清潔高尚は何如かな。余はまた世は微祿を辱なく上るに能わず。（出来  
よ ない）益を世に於て稗おぎなう下りて決然引去するも能はず。温山に對して徒いたすらに慚愧さんき（恥じる）有るに、今温山  
あにかか と別れんと欲して、豈懸りて懷の懸る無しかな。詳かに経る所を光景を記して、温山の復た見る可  
いた らずを傷むなり。

語釈

雲仙岳うんせんたけ 長崎県。紀行きぎやう 旅行中の出来事や見聞を記す。又其の文。温泉岳おんすゐだて 温泉の出る山、雲仙岳うんせんたけ 鎮西ちんせい 九州。巨鎮きよちん 大きな山、中心鎮

めとなる山。山上＝山の頂、山の上。冰雪＝氷と雪。戊午＝安政五年一八五八。熊府＝熊本城下。天草＝熊本県。岳甫吉＝人名。吉甫＝岳甫吉。春露  
 春の露。秋月＝秋の月。朝烟＝朝の露。暮霞＝暮れの霞み。奇態＝珍しく。不思議な。変わったさま。状難し＝形状、言い表し難い。雲散＝雲が  
 散り、晴れる。玉山＝美しい山のたとえ。蒼海＝青い海。天仙＝天の仙人。霄漢＝大空の意。蒼穹、躋攀＝よじ登る。幽秘＝奥深く密やかな。豈＝ど  
 うして、その。買舟＝舟を貸し切る。航す＝航海、舟で行く。雲仙＝長崎県に在り。烟＝露、煙り。浩蕩＝広大なさま。水の広々としているさま。月色  
 月の色。晴朗＝曇りのないさま、晴れ渡るさま。金波＝波が太陽に照らされて金色に輝くさま。閃爍＝閃き輝く。奇観＝珍しく不思議な眺め。  
 夜半＝夜中。驟雨＝にわか雨。痛飲＝思い切り酒を飲む。相携え＝提携。眉山＝宋の蘇軾の郷里の名、同名の山。山脉＝山が筋になって連なる。東奔  
 東に走る、森城＝森城下。峙す＝対峙。清秀＝清らかで秀でている。蒼鬱＝青く鬱蒼と。風景＝景色や風俗。掬む＝推し量る。助教＝助手。訓導  
 教え導く、明や清代書く府州縣に置かれた教員、旧制小学校の教諭。洵美亭＝亭の名。邂逅＝思いがけず巡り会う。詠む＝詩を詠む。三室＝地名。＝  
 簞墩＝簞＝たかむら、竹、竹藪。墩＝丘。堆い、集まっているさま。觴＝杯、酒を飲む。觴。執筆＝仕事が多く服装を整える閑がないこと。肯  
 き＝肯定。過る＝行く、通過、旅する。雨香＝雨に香る。觀水亭＝亭の名。挹＝汲む、とる、集める、引く。芬＝香ばしい、草が生えて香氣  
 を漂わす。會＝会う。味爽＝夜の明け方、暗さが明るさに変わるとき。乃＝即ち、其処で、まさに。還俗＝仏門僧籍から俗世に還る。齋所＝もたらす  
 もつてくる、もつていく。饒別＝博飯＝うつ、たたく、とらえる、にぎりめし。喫す＝食べる。畢＝終わる。山蹊＝山間の谷。頗る＝非常に、かなり。  
 嶮＝嶮しい。炎日＝炎熱の日。燬＝焼く、焼ける。流汗＝汗を流す。空海＝平安初期の高僧、唐の長安に学び、帰国後、高野山に金剛峰寺を縦、真言  
 宗を広めた、弘法大師。初所＝築く、始める創る。寺旁＝寺の傍ら。地獄＝罪惡を侵した者が死後に行つて種々の苦しみを受けるという所。難僧＝若い  
 僧、小僧。倩＝美しい、口元が愛らしい。地中＝地の中。噴烟＝噴出する煙り。硫氣＝硫黄の氣。喘＝喘ぐ。憩＝休憩。憩つ。未時＝今の午後二時頃。  
 一乘院＝院の名。撲＝殴る、叩く、打つ。石缸＝石橋。水中の飛び石。三途大河＝死者が冥土へ行く途中、死出の山を越えてから渡る川、善人は橋を、  
 軽い罪人は浅瀬を、悪人は深い所を渡ると云つ。無明橋＝善人は橋を渡る。晝々＝ごろごろと折り重なるように辺り一面に。劒戟＝剣と枝のある鉞。缸

石橋、水中の飛び石。劍山、山の名。藍、藍、蓼科の一年生草、青色の染料をとる。酒家、飲み屋。酢舗、寿司屋。閑牆、同じ垣の中で争つ、内輪  
 もめ、兄弟喧嘩。烟勢、煙の勢い。熾、熾烈、盛んに。輾然、巡る、廻る、反転、軋る。姦淫、男女の淫らな行い。客舎、旅館。  
 舎前、旅館の前。浴罷、浴びるのを止める、中止。杯、盃、酒を呑む。酒瓶、酒を入れる瓶。薪火、薪の火。煩さず、面倒をかけずに。自暖、自然に  
 暖まる。姦夫、悪人、人の妻と密通する男、まあとこ、まぶ。殺生、頃祖こと生かすこと、生き物を殺すこと、むごいこと。難産、難しいお産。  
 妄語、出任せを云う、出任せ名言葉、偽りをいう。種々、色々。名目、褒め称える、名指して注目する、物事の名称、ことわざ、口実として利用する  
 ことば。頗、長い、丈が高い、懇ろ、至る、傷ましい。普賢岳、山の名。客舎、旅館。穿ち、穴を開ける、掘る、突き抜ける。山路、山の道。崎嶇、  
 険しい山、山が平らでない。路旁、道ばた。異弁、変わった花弁。奇草、変わった草。落英、花びらや花房が落ちる。繽紛、乱れる、纏れる、過ぎる、  
 もつれ乱れる。烟勢、煙の勢い。阿闍梨、衆僧の模範となる高僧。天台宗、真言宗で僧の学位。暫憩、暫くの休憩。谿、溪谷。導者、道案内。巨石、大  
 きな石。草弁、草花。被摩、分ける、砕く、細かくする。罕々、飛蝶、飛ぶ蝶。少陵、小さな丘。魑魅、山や沼に棲むという化け物、人面獸身。虚語、  
 虚ろな言葉。循り、したがう。溪、谷川。怪巖、巨大な巖。簇々、群がる、集まる、簇。仆欲す、倒れそ。神悸、神を畏れ敬う。目眩、目が眩む。  
 運足、歩く、足を運ぶ。愈、いよいよ。嶮惡、嶮しくて悪い。甘香、甘い良い香り。心肺、心臓と肺。徹す、透、沁みる。屹立、高く聳え立つ。稍、少  
 し、僅か。股栗、足が震えて足が竦む。前難、前に進むのが難しい。状、状態。馬鬣、馬の鬣。坦地、平坦地。石竈、石で作った神仏を安置する小  
 箱。普賢菩薩像、遍く衆生を彩度する菩薩の像、白い象に乗った姿が画かれている。安、安置、安んじる。龍、龍のさま、受ける、盛る、寺の塔、神仏  
 を安置する小箱。蒼崖、青い崖。屏風、風よけに用いる家具、室内の仕切、装飾などにも用いる、衝立。風巖、風に曝された岩。旁、そばに。小樹、  
 小さな樹木。懸る、下がる、懸かる。泉石、泉水や石。鏝、石角、石の角。木根、木の根。一石泓、石の窪みで水が深い、淵。余輩、我が輩。茂樹、  
 樹木が茂る。鬱蒼然、青々と茂るさま。滴々、滴る。渴、渇き。泓、水が深い、淵。巖下、巖の下。踞、蹲る、しゃがむ。糧、食糧。  
 摩可、優れる、大きい、多い。山腹、やまの中腹。遙々、遙かに。海粘、海の波が緩くうねるさま。天飊、旋風、つむじ風。幽谷、深山幽谷、深い山

奥の寂しい谷。仙樂<sup>せんがく</sup>＝仙人の音楽。促し<sup>うなが</sup>＝催促。飄々<sup>ひょうひょう</sup>＝風に吹かれて軽く舞い上がるさま。遠路<sup>えんろ</sup>＝遠い道、遠くから。嶮<sup>けん</sup>＝嶮しい。氷谷<sup>ひやう</sup>＝氷の谷。  
 深林<sup>しんりん</sup>＝深い林。陰森<sup>いんしん</sup>＝森の陰。日色<sup>にっしき</sup>＝太陽。清涼<sup>せいりやう</sup>＝涼しく清々しい。石窟<sup>せきくつ</sup>＝石の洞窟。窟<sup>くつ</sup>＝洞窟。四時<sup>しじ</sup>＝四季、何時も、年中。近歳<sup>きんさい</sup>＝近年。夏日<sup>なつひ</sup>＝夏の日。鬻<sup>しやく</sup>＝粥、ひさぐ、売。片塊<sup>へんかい</sup>＝塊の欠片。索<sup>さく</sup>＝探す。膚<sup>ひ</sup>＝皮膚。遍身<sup>へんしん</sup>＝全身。粟<sup>りつ</sup>＝寒気のため肌が粟立つ。樹逾<sup>じゆ</sup>茂る<sup>も</sup>＝樹木がいよいよ茂る。  
 老幹<sup>らうかん</sup>＝老樹、大木の幹。古藤<sup>ことう</sup>＝古く大きい藤の木。路横<sup>ろおう</sup>＝道の横。屈曲<sup>くつこく</sup>＝曲がりくねる。様材<sup>さうざい</sup>＝細かく角張って突き出る。蟠根<sup>はんこん</sup>＝根が蔓延る、蟠る。  
 縦横<sup>じゆうけい</sup>＝縦に横。龍爪<sup>りゆうしゆ</sup>＝龍の爪。攫<sup>じやく</sup>＝掴む、握る。怪石<sup>かいせき</sup>＝奇怪な石。詭巖<sup>かいがん</sup>＝脆い巖。磊砢<sup>らいこ</sup>＝転がす、転ばす、石がごろごろ重なるさま、心が広く小さなことに拘らないさま。夜叉<sup>やじや</sup>＝凶悪で人を害することもあるが、正しい仏法を守護する鬼神。虬<sup>きゆう</sup>＝きゆう、龍の子で角があるとのこと。蛭<sup>ち</sup>＝みずち、雨竜、黄龍、角のない雌の龍。虎豹<sup>こへう</sup>＝虎と豹。岩頭<sup>がんとう</sup>＝岩の頂。蹲躡<sup>とんじゆ</sup>＝つくばう、しゃがむ、蹲る、踏む、履く、人の足を踏み付ける。木股<sup>もこ</sup>＝地名。谷<sup>や</sup>＝谷川。飛頭<sup>ひとう</sup>＝高い頭。蠻<sup>ばん</sup>＝野蛮、蛮人。鬼神谷<sup>きんしんや</sup>＝谷の名。老槐<sup>らうかい</sup>＝老樹の槐、豆科の落葉高木、家具器材として用いられる。鬱然<sup>いつぜん</sup>＝鬱蒼と。遮<sup>しや</sup>＝遮断。國觀<sup>こくかん</sup>＝山名。石筍<sup>せきじゆん</sup>＝鍾乳石が堆石して筍状になったもの。載<sup>のせ</sup>＝積載。葛攀<sup>かはん</sup>＝葛によじ登る。岩躡<sup>がんじゆ</sup>＝岩を踏みつける。喘々<sup>ぜんぜん</sup>＝喘ぎ喘ぎ。茂林<sup>もうりん</sup>＝茂った林。天狗<sup>てんく</sup>＝星が地上に落ちて居ぬの形になり、炎を上げるみの、隕石から想像された怪物、國、人の形をして居り、鼻が長く、空中を自由に飛ぶ怪物。棲<sup>す</sup>＝棲む。棲息<sup>せいしき</sup>＝海<sup>うみ</sup>の波のうねるさまが皺のように見える。布帆<sup>ふはん</sup>＝帆掛け舟。點白<sup>てんはく</sup>＝点々と白く。風景<sup>ふうけい</sup>＝風俗と景色。清爽<sup>せいそう</sup>＝爽やかで清い。紅日<sup>こうにち</sup>＝太陽。摘<sup>つ</sup>＝採る。扇笠<sup>せんりつ</sup>＝扇と笠。煩<sup>わづ</sup>＝煩さず＝面倒を掛けず。妙見<sup>みょうけん</sup>＝國土を守り、苦悩を除き、諸願を叶えさせる佛の像。妙見<sup>みょうけん</sup>＝山名。午時<sup>ごじ</sup>＝昼時。客舍<sup>きやくしや</sup>＝旅館。脚<sup>あし</sup>＝足。襟被<sup>えりぎ</sup>＝襟に首を埋め。臥<sup>が</sup>＝横臥、寝る。異蟲<sup>いじゆう</sup>＝変わった虫。屋後<sup>おくご</sup>＝家の後ろ。清涼<sup>せいりやう</sup>＝涼しく清々しい。寒々<sup>かんかん</sup>＝寒々。蟬<sup>せみ</sup>の名。蟬屬<sup>せみぞく</sup>＝蟬の仲間、親類。衝<sup>つ</sup>＝強行。途迂<sup>とぎ</sup>＝回り道。鮎<sup>あひ</sup>＝鮎返し＝魚切、鮎の遡上の限界。瀑布<sup>ふたふ</sup>＝滝。觀<sup>み</sup>＝視る。昏黑<sup>こんこく</sup>＝黄昏が暗く。酒沽<sup>しゆこ</sup>＝酒を賣う。鮮擊<sup>せんげき</sup>＝刺身やなますを食べる。侍<sup>じ</sup>＝侍る。晦日<sup>みづか</sup>＝月末。三勝<sup>さんしやう</sup>＝三つの名勝区。阿蘇<sup>あそ</sup>＝山名。海中<sup>うみなか</sup>＝福岡市東区。温岳<sup>おんたけ</sup>＝雲仙。幽邃<sup>ゆうすい</sup>＝奥深く寂しい幽玄。千里<sup>せんり</sup>＝人名。文哉<sup>ぶんや</sup>＝人名。清<sup>せい</sup>＝清々しい。麗<sup>れい</sup>＝麗らかな。警<sup>たえ</sup>＝警える。幼妙<sup>ようみゆう</sup>＝若々しい。處女<sup>じよ</sup>＝乙女。丈夫<sup>そうぢゆう</sup>＝壮年の男。高秀<sup>かうしゆう</sup>＝高く秀でる。幽<sup>ゆう</sup>＝幽かな。仙藥<sup>せんやく</sup>＝仙人の薬、靈藥。嘉樹<sup>かじゆ</sup>＝良い樹木。長生<sup>ちやうせい</sup>＝長生き。脩<sup>しゆ</sup>＝修める。宜<sup>よし</sup>＝良い。肥遯<sup>ひぼう</sup>＝逃れる、隠れる、去る、逃げる。噫<sup>い</sup>

「感嘆詞」 許由きよゆ 中国古伝説中の隱者、天子の堯が位を譲ろうとしたのを断り、身をかくした。會心かいしん 心の中で覺る、心に適う、箕山きさん 伯夷はくい  
舜の時代に礼を司取った人。首陽しゅやう 伯夷が武王を諫めたが聴き入れられず、首陽山に行つて餓死した。伯陽はくやう 老子の別名。會稽かいけい 山名、春秋時代に越王  
が呉王に會稽山で破れた故事。四皓しほ 東園公、角里先生、綺里季、夏黃公の四人の老人、秦末の乱を避けて商山に隠れたが、高祖が太子を廃位しようと  
したとき、張良の招きにより太子を補佐板ので、高祖は廢位を諦めた。商山しやうざん 山名、四皓の隠れた所。謝安しやあん 晉の名臣、字は安石、武帝の時建昌縣公  
に封じられた。東山とうざん 晉の謝安が隠れた山。思邈しへつ 遥かに遠い思い。太白山たいはくざん 山名。圖南とうなん 大事業を企てるたとえ、鵬というおおきな鳥が翼を羽ばた  
て九万里も空高く舞い上がり、南の海に飛ばうとしたたとえ話。華岳かたけ 山名。朱栲亭しゆかうてい 亭名。武夷ふい 武帝。脩しゆ 修める。清潔せいけつ 潔く清々しい。高尚こうかう  
上品。微祿びろく 小祿。辱じよく 屈辱、恥ずかしい。稗ひ 補う、益、布を継ぎ足す。決然けつぜん きつぱりと。徒いふ に漫然と。慚愧ざんかい 恥じる。光景こうけい 有様。狀態じたい 傷  
み 悲しむ。復たまた 復える、又。

21 衆芳亭記

南竹十數竿繞屋而蕭然者永野實耶衆芳亭也予之游天草也一日過實町擊鮮置酒屬亭記於余々問其所以名曰桃李牡丹之天艷梅花水仙之清潔凡小薦異葩之不知名遍種多養以求唯是壳花翁郭橐駝之事而吾衆芳非此之謂也春日之遲々春服既成携童子提酒壺出亭游山之阿爛者吾芳也水之浜<sup>しづみ</sup>者吾芳也池塘之烟巖角之雲莫往而非吾芳也對芳而酌々而歌醉而臥覺而歸行無牽止無尼唯吾耶欲余於是喟然曰奇哉亭也王侯貴人其國萬乘其對封萬戶可謂大矣然而日座深宮穆々如也言則左史動則右史出則從者護車絡繹塞路雖欲窮山阿經水浜縱觀芳如實耶得乎獨實耶主掌大之園能有天地間衆芳較諸彼孰失吾今而知求富貴之為惑矣噫實耶真所謂与造物游者吾願与焉乃拳觴而歌曰

逢此春日之遲々兮、今吾不樂兮負芳菲、踏彼芳草之青々兮、与子携手兮歌而歸

釈文

しゅうほうていき  
衆芳亭記

南竹十数竿屋を繞りて蕭然（物寂しく）、永野實耶の衆芳亭なり、予は天草に遊び、一日ここに過す實耶、擊鮮置酒（鮮魚と酒を準備して）以て成す、此の衆芳亭に屬して記す。

余は其の名する所について問いに曰う、桃李牡丹の天艶梅花水仙の清潔の外の小葩異葩これ名知らず、遍ねく種え多く養い以て、唯いるを求めてにの花う売る、翁の郭橐駝（植木の名人、駱駝のように腰がまがっているので云う）の事を吾（親愛の意を籠めて云う）が衆芳亭と之れ謂うに非ず、春の日遅々春の服既に携え成す童子（子供）が酒壺を提げて亭を出て、阿爛（寺のこと）に游山（遊ぶこと）是れ吾が芳ばしきなり、水の浜が玉の光りのように璨（輝く）吾が芳ばしきなり、池塘（堤）の巖角これ雲に烟りる、往く莫れ芳ばしきに、対して酒を酌み酔いて歌い、臥して覚め帰り行く牽し止める無く、尼く無く唯だ吾が實耶余は是れ喟然（嘆息、感心する）せんと欲す曰う奇なるかな亭なり、王侯貴人其の國万乗（一万台の兵車を徵発して領有できる領土の君主）其の万戸を封ずることを謂う可しこ大なり、然るに日に座す深宮（奥深い宮殿）穆々（恭しく）の如し、言に則ち左史が動き則ち右史が出でて車を護るに従い、絡繹路を塞ぎ（左史は天子の行動の記録係り右史は天子の発言の記録係りが天子の乗った車を護り人や馬の行列が続いて路を塞ぐ）、山の果てまで河を経るその水浜に縦い観るよ

うな芳しき如くである、獨り實耶主掌じやうしやう（一人で支配する）のの大いなる園能く、天地の間に有し衆芳諸しやうほうしよ、  
彼孰得孰失に較べて吾れ今にして知る富貴ふうきを求めるを為す惑まどう、噫ああ、實耶真まことの所謂いう、万物を創  
造する神は游者と吾が願いずくい焉んぞ、乃ち鰯さかすきを挙あげて歌つて曰いう。

逢此春日之遅々兮 此れ逢う春の日 遅々たり

今吾不樂兮負芳菲 今 吾れ樂しまずして芳菲ほうひに負そむく

踏彼芳草之青々兮 彼の芳草ほうそうのこれ青々せいせいたるを踏ふむを

与子携手兮歌而歸 子しと手を携たずさえて歌つて歸らん

書釈 衆芳亭記しやうほうていき＝亭の名の由来。竿かん＝竿、竹。屋おく＝家。繞めぐる＝巡る、周りを取り巻く、廻り。蕭然せうぜん＝物寂しいさま。永野えい＝姓。實耶じや＝名。衆芳亭＝

亭の名。天草あまのくさ＝遊ぶ。訪あそれる、旅、行く。擊鮮げきせん＝新鮮な魚を食べる。置酒おきしよ＝買った酒。属しやく＝依頼、頼まれる、委嘱。亭記ていき＝亭の記事、亭の謂われ。曰いく＝云つ、述べる。桃李とうり＝桃とスモモ、自分が引き立てたり推薦したりした者、そのようにされた立派な人物、門人。桃李を植えれば夏に木陰で休み秋に実を食べる事が出来るという古語に元図区、桃や李は別に口をきて人を招くことはしないが、よい花や実があるから、にんが争つて来て、その下に自

然に道が出来る、徳のある人には自然に人が心服するたとえ。牡丹<sup>ぼたん</sup>花の名、深見草<sup>ふかみくさ</sup>。天艷<sup>てんえん</sup>若々しく艶やか。梅花<sup>ばいか</sup>梅の花。水仙<sup>すいせん</sup>水中の仙人、戦国時代の屈原など、草花の名。清潔<sup>せいけつ</sup>清らかで潔い。凡小<sup>ぼんしょう</sup>全て小さい。葩<sup>は</sup>花。遍<sup>あまね</sup>く隅から隅まで。翁<sup>おきな</sup>老人。郭蒙<sup>かくもん</sup>植木の名、郭は姓蒙<sup>たけだ</sup>は蒙<sup>かく</sup>。はらくだ、背が曲が隆起して作田に似ているから蒙<sup>もん</sup>馳<sup>ち</sup>という通称になった。衆芳<sup>しゅうほう</sup>香りを集めるの意。春日<sup>しゅんじつ</sup>春の日。遅々<sup>ちぢ</sup>遅れるさま。春服<sup>しゅんぷく</sup>春の着物。童子<sup>どうじ</sup>童子供。酒壺<sup>さけつぼ</sup>酒瓶、酒を入れる壺。提げ<sup>さ</sup>提げて、持つて。携え<sup>たづな</sup>携行、携える、持つて。游山<sup>ゆうざん</sup>山に遊ぶ、行楽。ピクニック。阿爛者<sup>あらんしや</sup>梵語、静かな所に意。寺。芳<sup>ほう</sup>芳しい香り。璨<sup>さん</sup>玉の光るさま、玉の光。池塘<sup>ちやうたう</sup>池の堤。土手。謂<sup>い</sup>う云う、述べる。薦める<sup>けり</sup>推薦。烟<sup>けり</sup>煙。巖角<sup>いがんかく</sup>岩角。莫<sup>なかれ</sup>無かれ、無い、夕暮れ、暮れ。酌々<sup>しやくしやく</sup>酌をするさま。牽<sup>ひ</sup>引き、引く。臥<sup>が</sup>横臥、寝る、伏せる。尼<sup>じつ</sup>、昵懇、親しい、尼。耶<sup>や</sup>、かの疑問。喟然<sup>きぜん</sup>嘆くさま。奇<sup>き</sup>珍しい、奇しくも。王侯<sup>おうこう</sup>帝王と諸侯。貴人<sup>きじん</sup>官位身分の高い人。万乘<sup>ばんじやう</sup>一万台の兵車、その兵を徴発することの出来る領地を有する君主、原則としては天子。封<sup>かう</sup>封じる。万戸<sup>まんこ</sup>一万戸。謂<sup>い</sup>う云う述べる。深宮<sup>しんきゆう</sup>宮殿の奥深く。穆々<sup>ぼくぼく</sup>態度の麗しいさま、恭しいさま。左史<sup>さし</sup>昔天子のそばに仕えた記録係。左史は天子の行いを記した。右史<sup>うし</sup>昔天子のそばに仕えた記録係。右史は言葉<sup>ことば</sup>を記した。從者<sup>じゆうしや</sup>お付きの者。護<sup>まも</sup>護る。護衛、守る。絡繹<sup>らくえき</sup>人馬の往来が続くさま、連なり続くさま。塞路<sup>さいろ</sup>路を塞ぐ。雖<sup>いふまでも</sup>唯、助字解説、確定の助字、けれども、仮定の助字、たとい、としても、これ、発語も助字。窮欲<sup>きゆうよく</sup>す窮まる。山阿<sup>さんあ</sup>山の隅。水浜<sup>すいひん</sup>水辺。縱觀<sup>じゆうくわん</sup>自由に観る、存分に観る。芳<sup>ほう</sup>芳しい香り。主掌<sup>しゅしやう</sup>主に司る、代表支配人。大園<sup>だいえん</sup>大きな庭園、植物園、農園。能<sup>よ</sup>能く、良く。天地<sup>てんち</sup>天と地。諸較<sup>しよかく</sup>べ諸々と比較。孰<sup>じゆく</sup>いずれ。失<sup>うしな</sup>う無くする。富貴<sup>ふうき</sup>富貴と貴人。惑<sup>まど</sup>う迷う、迷い惑う。噫<sup>い</sup>嗚呼、感嘆詞。真<sup>しん</sup>本当の。造物<sup>ぞうぶつ</sup>造物主の略、万物を創造する神。遊ぶ<sup>あそ</sup>訪れる、旅、行く。与<sup>とも</sup>共に。焉<sup>えん</sup>いづくくぞ、なんぞ、疑問反語の意を表す、これ、ここに、これより、これに句末に用いる助字、か、や疑問反語の意を表す。乃<sup>だい</sup>なんじ、それがし、すなわち、そこで、上を受けて下文を起こす助字、なんぞ、語調を整える助字。觴<sup>さう</sup>杯。盃<sup>はい</sup>盃。挙<sup>あ</sup>挙げ、上げる。春日<sup>しゅんじつ</sup>春の日。遅々<sup>ちぢ</sup>遅いさま。兮<sup>けい</sup>語調を整える助字に用いる、韻文の句末、または中間にあつて余情をそえる、感嘆を表す。樂<sup>たのし</sup>まず、楽しまない。芳菲<sup>ほうひ</sup>芳しい蕪に似た根葉を食用にする、菲は薄い、粗末な。踏<sup>ふ</sup>む踏む、歩く。芳草<sup>ほうそう</sup>芳しい草。青々<sup>せいせい</sup>青々と。子<sup>し</sup>甲田威郷。与<sup>とも</sup>共に。手携<sup>てりあ</sup>え、帯同、一緒に。

14 遊岩戸記

橘南溪。西游記載。溯玖麻川者七里。在神瀨岩戸。天下第一奇處也。余在東肥。數以問人。無有知之者。一日逢上村某。談及此。某云。吾嘗游焉。蓋有距佐敷三里餘處。真奇處矣。戊午秋。予有日隅之行。因道佐敷。遂得觀岩戸云。九月十有八日。晴。朝發佐敷。過金丸。己牌。至神白木。山路崎嶇。人跡至少。午牌。至長祖口。問津一老翁。云。舟子即吾。刺刀渡玖麻川。々極急流。有千里一日之勢。翁操篙至巧。絕流而前。一瞬之際。刀達岸。登岸而左者數十步。得一大林。々皆榎楠。老幹輪囷離奇。鬱葱蓋天。穿林而進。碧蘚滿地。如展青氈。行者二十武。得一大石山。山上林木蔚薈。旁有瘦樹。懸焉。苔蘚被之。蒼々然。下有一大峒。是為岩戸。鍾乳下垂。纍纍然。有如乳房者。有如懸瓢者。有如蜂房者。有如懸劍者。有如垂拳者。有如伸十指者。異態萬狀。愈出愈奇。洞中安一小祠。々旁有二奇品對立。中開上合。欲合而不合。經崑間而入。洞中暗黑。中有一大穴。極深。臨穴凝睛。則十尋之底。有炯然者。蓋水也。滴露如雨。循乳石而下。落深穴中。鏗然成琴瑟聲。餘韻隱々滿洞中。如雲門咸池一時並起。余聽而樂之。坐石上者久之。取筆題名石上而出。則夕陽在山。小鳥數十。遙悲鳴于山上林木之際。余疑一足鳥也。偶逢

賽祠者。問之。果然。或曰。是鳥一足也。故以為名。或曰。否。其一短而小。有如亡。故名焉。噫。是山也。以在深山之中。僻鄉之間。其奇如此。而土人猶有不之知者。有類乎岩穴之士不得時者。記之者。傷好山而無知者也。

## 釈文

岩戸いわとに遊び記す

橘南きつなんの溪けいに西游せいゆうして記載きざいする。玖麻川くまがわを溯さかのぼるそれ七里にして神瀬岩戸しんせいわとが在り。天下第一の奇處なり。

余は東肥ちつひに在りて。數を以て人に問う。之れを知る者有る無し。一日上村某に逢う。此の談に及び某

は云う。吾れ嘗あそつて遊ぶ。蓋し佐敷さしきは距へだつ有り三里餘の處に真に奇處きじょなり。戊午ぼへの秋。予は日隅にちぐうに之

れ行く有り。因に佐敷さしきの道を遂に岩戸いわとを觀るを得て云う。九月十有八日。晴。朝佐敷さしきを發つ。金丸を

過りて己に牌はいは神白木に至る。山路さんろは崎嶇きくにして人跡は至りて少し。午牌じはい。長祖口に至る。津つの一老

に問う。翁ふなこ曰く。舟子ふなこは即ち吾れ。刀を刺し玖麻川くまがわを渡る。川は極て急流にして千里一日の勢が有り。

翁の操る篙こうは至りて巧せうに絶流ぜつりゅうを而て前に。一瞬の際に刀は岸に達す。岸に登り而て左にそれ數十歩。

一大林を得る。林は皆梗楠なり老幹の輪囷は離奇にして鬱葱と天を蓋う。林を穿ち而て進む。碧蘚は地に滿ちて青氈を展るが如し。行くそれ二十武。一大石山を得る。山上の林木は蔚薈たり旁に瘦樹が有り。懸る苔蘚は之れを被る。蒼々然として下に一大峒が有り。是れ岩戸と為す。鍾乳が垂れ下り。鼎鼎然として乳房の如きそれ有り。瓢の懸る如きそれ有り。蜂房の如きそれ有り。剣の懸る如きそれ有り。垂拳の如きそれ有り。十指を伸すそれ如き有り。異態は萬状にして愈いよ出で愈いよ奇なり。洞中に一小祠を安じ。祠の旁らに二つの奇岳が有り對立して中を開け上を合す。合すを欲すも而て合はず。岳間を経て而て入る。洞中は暗黒にして。中に一大穴が有り。極めて深し。穴に臨み眼を凝す。則ち十尋の底なり炯然としてそれ有り。蓋し水なり。滴る露は雨の如し。乳石循り而て下る。深穴の中に落す。鏗然と琴瑟の聲が成り。餘韻は隱々として洞中に滿ちる。雲門咸池が一時に並び起るが如し。余は聽き而て之れを樂む。石上に坐すそれ之れ久し。筆を取りて名を石上に題し而て出る。則ち夕陽は山に在り。小鳥が數十と遙かに鳴く山上の林木の際に悲しや。余は疑う一足の鳥なり。偶たま祠竇に逢うそれ之れを問う。果然。或は曰く。是れ鳥は一足なり。故に以て名を為

す。或は曰く。否。其の一短は而て小にして亡う如き有り。故に名を噫あ。是れ山なり。深山の中に在り以て僻郷の間に其の奇は此の如し。而て土人は猶お之れを知らず者有り。岩六の土は時を得ずそれ類す有り。之れを記すそれ。山を好み而て知るそれ無く傷むなり。

## 語釈

遊旅する。岩戸記＝岩戸の記事。橋南＝蜜柑の採れる南。溪＝溪谷。西游＝西方に旅する。記載＝記し載せる。玖麻川＝熊本県八代港の河口より溯り市房ダムに至る。遡上＝流れの逆に上る。神瀬岩戸＝熊本県、玖麻川沿い。東肥＝東肥後。游＝旅する。佐敷＝熊本県芦北町。奇處＝珍しい、不思議な所。戊午＝安政五年、一八五八。日隅＝日向國、大隅國。牌＝名札、表札。門に功績を記した札。門。山路＝山道。崎嶇＝山路が平らでなく峻しい、山が峻しい。午牌＝牌を後にして、門を後にして。津＝港、船着き場。舟子＝船頭。篙＝竿、舟竿、舟を押し進める竿。絶流＝激流。櫂＝二レの木。楠＝楠。老幹＝年代ものの木の幹。輪困＝曲がりくねるさま。離奇＝抜けて、連なりつき珍しい不思議。鬱葱＝青々と茂るさま。蓋つ＝塞ぐ、覆い、被せる。穿ち＝あなを明ける、穿孔。碧鮮＝青い苔。青氈＝青い毛氈、青い敷物。展る＝広げる。蔚薈＝草木の茂るさま、雲の盛んに湧くさま。瘦樹＝瘦せた樹木。苔鮮＝苔。蒼々然＝青々としたさま。峒＝山の洞窟。鍾乳＝鍾乳洞。鼎鼎然＝石や岩がごろごろと重なり合つてるさま。乳房＝乳房。瓢＝瓢箪。蜂房＝蜂の巣。垂拳＝拳を垂れる。十指＝両手の指。異態＝変わったさま。愈＝いよいよ。奇＝珍しく、不思議な。小祠＝小さな祠。安＝安置。祠旁＝祠の傍ら。奇岳＝珍しく不思議な岳。岳＝山にある大きな岩、岩。嶺對立＝対に立つ、向かい合つて立つ。岳間＝岩の間。經＝経る、経て。洞中＝洞の中。暗黒＝真っ暗。十尋＝十尋。尋は約七尺。炯然＝光の明かなさま、くつきりとしている。蓋＝思つに。乳石＝鍾乳石。循り＝巡り。鏗然＝鐘をつく音、かかんとした音。琴瑟＝琴と大琴、静か。餘韻＝鐘などをついたときに、後に残る響き。隱々＝憂えるさま。

傷むさま、幽かではつきりしないさま、寂しいさま。夕陽せきやう〓夕陽ゆつひ、夕日くさく。偶ぐう〓偶然しざい。祠し〓お祭りで、参詣人さんぎにん、参拝者さんぱいしや。果然かせん〓果たして。深山しんさん〓深山、  
 深い山。雲門うんもん〓黄帝のとき作られたという音楽の名。咸池かんでい〓神話で、太陽が水浴するという天上の池。黄帝が作った音楽の名。僻郷へききやう〓僻村、僻地。岩穴がんけつ  
 〓岩穴。好山こうざん〓山を好む良い山。傷むいたむ〓哀しむ、悲しむ。類るい〓たぐい、同類。

戊午冬某日南子游延岡逆旅主人有米顛癖出一奇石示余曰此石似行滕瀑布吾邑勝景行滕為最瀑布高數十尋廣數十丈而純石為山々頂有一金松託根巖間老幹挺然而上者三尺許忽然而折々而屈々而曲枝之所走根之所迸如龍如虬蜿蜒交錯鬱然蓋大盤石々平坦如砥莓苔生焉上下一碧蒼然絕塵真奇絕也然路嶮不易登欲登之者非攀龍角躡馬鬣不能不幸失足則陷不測長為谷底之鬼僕之游行滕也獲此石於溪間携而歸朝夕摩挲者年所手沢着石自然生潤沢矣余受而觀之石大如拳密質赭色皺成折帶宛乎倪迂筆法矣余平生愛画山水最喜雲林及目此石恍乎神往蠅屐已決矣其夜原子齎酒肉來訪余於旅館酒間談及行滕原子曰僻鄉蚩有佳景不歷名士品題焉得而顯哉吾子幸為吾一游而記之予唯々其翌早起顧瓶酒猶余矣乃盛于瓢掛于枝飄然出旅館則天已明矣午時至高埭遙見一山露頂於烟嵐中不問而知其為行滕也未得達其麓青松紫楓老檜枯木交加錯雜密々成林々下多小蹊由一蹊而進里許蹊漸小落葉埋蹊々殆不可弁余以為誤路矣直出林而去又得一蹊而進蹊亦漸小余以為亦誤矣乃脱行李而憩石上忽聞伐木之響丁々出幽谷余以為且行問樵夫耳乃尋斤声而去

行里許果得樵夫曰第行無有岐路又行里許林忽然而絕山屹然而立瀑布淙然而下々有一巨石坦然而橫高一丈長可三丈可座而游余上而座々而仰則瀑布自天來触石角碎而散成千百珠玑又合為一條而下瀑左右有危岳老樹蒼然而懸焉瀑之上有瘦而如苔竄然而立者熟視之古松之雜枯木也天風時過紛雨天華異而視之乃松釵之落也好景幽趣一々可掬余於是悠然而頽飄陶然而樂之已而夕陽西頽林鳥啾然而鳴溪颿颿然而悲使人蕭然而髮之暗然而魂消也乃出谷而去只恨短景促人不得目所謂金松者也夫柳之山得子厚而顯矣惜乎有若景而無若筆也雖然使予頽然而醉陶然而樂者原子之酒与山也豈可無記焉乎安政五年戊午某月日記

## 釈文

行滕こいつに遊び記すあそ

戊午ぼしの冬の某日ぼうじつ南子延岡なんしのへおかに遊ぶあそ、旅館主人は米顛癪べいてんへき（山水の凝り性）有り、一奇石いちきせきを余に示し曰う、此の石は行滕こいつの瀑布ばふ、吾が邑むらの勝景しょうけいとして最たるを為す、高さ数十尋ひろで廣さ数十丈なり、純石じゆんせきは山を為す山頂さんちようには一金松いちきんしょうの、根を巖間がんかんに託たくし、老幹ろうかんは挺然ていぜん（長い枝先）として上は三尺許り、忽然こつぜんと折れ折れて

いるところは屈り屈つて曲つた枝の所、龍の如く虬の如し、蜿蜒（蛇などがうねり動くさま）と交錯（入り乱れて）鬱然としている、大盤石の石、石は平坦砥の如く莓苔（苔の類）生て、上下一碧蒼然絶塵真に奇なりこと絶なり、然れど路嶮しく登らんとするならば、龍の角に馬の鬣を躡んで攀じるようなものであるう、足を失なわなければ幸いである、則ち不測に陥ちては長えに谷底の鬼の僕に為す、これ行滕に遊びなり、此の石を獲りて溪間より携えて帰り、朝夕に摩挲（手で撫でる）して年所手沢着き石は、自然に潤沢を生ずる。

余は受けて之れを観る石の大きさは拳の如く、密質赭色で皺は折帯を成し宛ら、倪の迂り筆法が、余は平生は画を愛す山水最喜の雲林、目に及びこの石恍とりとして、神は已に獵屐（採りに往くこと）を決める。

其の夜原子酒肉を齎して来訪する、余は旅館に於て酒間談りて行滕に及ぶ、原子は曰つ僻郷佳景有ると雖も、名士品題に歴せず、顕らかに得られるかな、吾と子は幸にも一游を為す、之れを記す唯々（はいはいと）其の翌早起し、瓶酒を顧みれば猶お余りあり、瓢に盛り瓢を枝に掛けて、飄然と旅館

を出る天は己に明るく午時高桎に至る、遙か見る一山露頂烟嵐(山露、霧)の中、問はずして其れを知る  
は行滕なり、未だ達せず其の麓、青松紫楓老い檜の枯木交錯(入り乱れる)し雑を加える、密々(細かいさ  
ま)と林を成し林の下に多少の蹊一蹊より進むこと一里許り、蹊は漸く小さくなり落葉蹊を埋め殆ど辨  
からず、余は路を誤り直ちに林を出て去り又た、一蹊を得て進むと漸く小さく、余は亦た誤りを為  
す、行李(荷物)を脱して石上に憩う、忽聞く伐木の響丁々(木を切る音)たり、余は幽谷を出て行き、樵夫  
(樵)に問う、斤声を尋ねて去り行くこと一里許り、果せるかな樵夫の曰う、岐路有りて又行くこと一  
里許り、林は忽然と山を絶して屹然(高く峙つ)、瀑布立ちて淙然(水が流れるさま)と下る、下に一巨石有り坦然、  
高さ一丈可り長さ三丈可りに横たわる座るべし余はその上に座して遊び、座して仰ぐ、瀑布は天より  
来りて石に触れ角を砕き散じて、千百珠玑(丸い玉と角ばった玉)又合す左右に下瀑一條為し、危岳老樹蒼然  
として懸り、瀑の上に瘦て有り苔は矗然(高く聳える)が如く立つ、熟視すればこれ古松の枯木雜る、天風  
時に過ぎて紛雨天華異なり、之れを視てば松釵(松葉が釵のようだから)の落るなるの、好景幽趣を一つ一  
つ掬む可し(手で掬う)、余は是れ悠然と飄を傾けて陶然として、これを楽しむ己にして夕陽西に頽むき、

林鳥多く嗽然として鳴き、溪は颯が颯然（盛んに）として人を使って悲しくさせ蕭然（物寂しく）と、髪立ちて暗然（暗くなり心が塞ぐ）と魂が消えるようである、乃ち谷を出て去る、只だ恨むは景色人を促して得ず、目する所謂（い）に金松は、抑も山なり原子頭（あきらか）に得る、惜むらくは若き景有りて若き若き筆無くは然りと雖も、頽然（たいぜん）（酔うてくずれするさま）として陶然（とうぜん）（うっとり）と酔うに酔て樂しむは原子の酒と山なり、豈記す可き無し。

安政五年戊午某月日記す

語釈

行藤記＝行藤の山に記す。行藤山＝宮崎県延岡市郊外の山、標高八三二米。戊午＝安政五年、一八五八。某日＝ある日。南子＝南部五竹。延岡＝日向。逆に＝反対に。逆行。遊ぶ＝訪れる旅、行く。旅主人＝旅館の主人。米顛の癖＝山水を愛す心が氣狂いじみた凝り性の癖。一奇石＝一つの珍しく不思議な石。曰く＝云う、述べる。行藤＝山名、行藤は、むかばき、脚絆のこと。吾邑＝自分の村、里。勝景＝景勝。瀑布＝滝。尋＝長さや高さを測る単位、周代は八尺、日本では六尺。純石＝全部が石。山頂＝頂上。一金松＝松。巖間＝岩の間。託し＝預け託す。老幹＝老いた大木の幹。挺然＝突き出るさま。忽然＝忽ち、突然、急に。折々＝折れるさま。屈々＝曲がるさま。進る＝走る、勢い良く流れる、避け逃れる。龍＝龍。竜。虬＝水竜。蜿蜒＝うねうねと曲折してささま、うねうねと曲折したり動くさま。交錯＝入り乱れる。鬱然＝鬱蒼と茂るさま。蓋＝おもつに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説、なつmぞ、反語の助字。大盤石＝大きな一枚岩。平坦＝平らな。砥＝砥石。莓苔＝苔。焉＝いずくんぞ、なんで

疑問反語の意を表す、これ、ここに、これより、これ句末に用いる助字、か、や疑問反語の意を表す。一碧＝蒼い、青い。蒼然＝蒼いさま。絶塵＝塵を断つ、世俗を断つ。真に＝本当に。奇絶＝珍しく不思議な。攀＝よじ登る、登攀。龍角＝龍の角。躡＝踏む。馬鬣＝馬の鬣。陷ち＝陥落、墜ちる。測れず＝測れない。鬼僕＝鬼の使い、死に神。獲る＝捕獲、獲る。溪間＝谷の間。携え＝携える、持つ。摩挐＝手で撫でる。年所＝年を経て。手沢＝手による光沢。潤沢＝光沢が潤い。密質＝密實な性質。赭色＝赤い色。皺成＝皺に成り。折帯＝折った帯のように。宛も＝丁度。倪倅＝ややかよわく。筆法＝筆使い、書法、流儀。平生＝普段、日常。山水画＝山と水の景色、風景の絵。雲林＝雲と林、雲の中の林。恍乎＝恍惚、ウツトリと。往く＝行く、往く。蠅屐＝履き物。已に＝既に。酒肉＝酒や肉。齋し＝持参、もたらす、与える、渡す、贈る、餞別。來訪＝訪ねて来る。酒間＝酒の間。談＝談話。原子＝人名。曰く＝云う、述べる。僻郷＝田舎、辺鄙な、山の中。蚩う＝笑う。佳景＝佳い景色。名士＝才徳の優れた人、有名な人。品題＝物の題。歴さず＝順序立てない、経ない。顕れ＝現れる、顕れる。吾＝我、五竹。子＝一游＝訪れる、旅、往く。瓶＝酒瓶。顧る＝思う、反省する。乃＝なんぞ、それがし、すなわち、そこで、上を受けて下文を起こす助字、なんぞ、語調を整える助字。于＝ここに、これ発字の助字、文首文中の用いる助字、に補語場所を示す、を、補語を示す、と、接続を示す、より、から比較場所を示す、おいて、か、かま文末にあつて疑問感嘆を示す。飄＝飄筆で作り酒や水を入れる容器。飄然＝風に吹かれるように、ふらりと。午時＝昼時。高埜＝地名。麓＝山の裾、麓。頂＝頂上。露れ＝露出。烟る＝煙る。嵐＝強風。紫楓＝紫の楓。老檜＝古い檜。枯木＝枯れ木。交錯＝入り乱れる。密々＝密林、ぎつしりと繁茂。成林＝林と成る。小蹊＝小道。由＝徑由。漸く＝や々と。一蹊＝一つの小道。里許＝里の所。落葉＝落ち葉。蹊々＝小道が多く。弁る＝見分ける。誤り＝間違ひ。憩う＝休む憩。伐木＝木を伐る。響＝音響、音と響き。丁々＝木を伐る音、碁を打つ音、琴を奏でる音、鳥の鳴き声、その他色々な音の形容。幽谷＝幽かな谷。樵夫＝樵の人。乃＝なんじ、それがし、すなわち、そこで上を受けて下文を起こす助字、なんぞ語調を整える助字。尋る＝聞く、訪れる。斤声＝斧の音。曰く＝云う述べる。岐路＝分かれ道。忽然＝忽ち、突然、急に。屹立＝屹立、きつとして立つさま。瀑布＝滝。淙然＝水の流れるさま、また、その音。一巨石＝一つの巨大な石。坦然＝平坦なさま、平らなさま。自＝自から。瀑＝激しい雨、滝。水しぶきを上げるさま、水が湧き立つさま、瀑流、飛泉、懸瀑、飛

瀑 落瀑 左右 左と右。危岳 危険な巖、峻しい岩。老樹 老いた樹木。懸る 架かる、懸かる。瘦る 痩せる、細くなる。凜然 潤すさま、ゆうは  
 文包み、文袋、書物を入れる袋、衣服に移り香がする、潤す。珠玑 丸くない珠玉、星の名、北斗七星の第三星。蒼然 青々としたさま。一條 一筋。  
 熟視 良く見る、目を凝らし見る。古松 古木の松。雜 雜然、諸々の。枯木 枯れた木。天風 天の風。紛れ 乱れる、入り乱れる、もつれる。天華  
 雪の別名、天下の妙花。異る 違つ。松釵 松葉。釵は簪、松葉は簪に似ているから。好景 好ましい光景景色、佳い景色。幽趣 幽かな趣。一々  
 一つ一つ。掬む 掬う、推量。悠然 ゆつたりとしたさま。頗 長く、長い。飄陶 飄々と陶然、ふわふわと風に舞い上がりそうに酔ったさま。樂  
 娛樂 楽しみ。己に 既に。既に 既に。夕陽 夕日。啾然 鳴く、鳥や虫などの悲しげな鳴く声、口ずさむ。溪 谷。飄飄然 旋風がさつと吹くさま。蕭然  
 寂しそつなさま。暗然 暗いさま。魂消る 驚く。短景 良くない景色、足りない景色。恨む 怨む、恨む。促し 促進、催促。謂つ 云う述べる。  
 金松 金色の松。子厚 人名。顕る 顕れる。惜む 惜しい。若景 足りない景色。若筆 足りない筆、未熟な筆。雖 唯。然り 其の通り、さ  
 よつ。頽然 崩れるさま、酔って倒れるさま。陶然 酔ったさま。原子 人名。与 共に。豈 あに、どうして。焉 いずくんぞ、なんぞ。乎 よ、  
 や呼びかけの言葉か、な感嘆を表す、ああ、か、や、ぎもん、反語を表す形容詞につけて強く状態を表す、にを、より、場所、時間、目的比較を表す。  
 戊午 安政五年、一八五八。

## 24 米良紀行

戊午冬。南子將游米良。以某月日。宿玖麻客舍。問主人以米良行程。主人曰。米良道路嶮惡。且五穀不生。土人只食稗稗甘藷之類。屋亦矮小。無家可宿。距此七十里。有稻荷祠。司祠者。家差寬廣。游米良者。多就而宿焉。余以路險而晷短。非早行不能。其夜戒糧。以夜半發湯前。時月色晴朗。霜氣逼人。行里許。有一溪。入溪里許。得又路。偶見樹下有一木表。白而書曰。右走米良。墨痕猶新。林下暗黑。然髣髴辨字。自此溪路至小。行十數步。有高山。既踰之。則又有二山。相對而立。滿山生樹。路在山腹。其小纔通一人。落葉沒鞋。其深可三尺。移步漱々有聲。宿鳥為之驚起。路左右。古木槎枿。偶見巨蟒橫於前。駭而駐杖熟視之。老樹影也。行樹間二里許。行聞遙籟度谷底。蓋溪水聲也。及樹絕。而路稍大。里許。路又小矣。而羊腸達谷底。下者半。遙聞鷄聲。覺人家不遠。既達谷底。有兩三破屋。寒燈漏壁。耿耿如星。足音蹻然響谷。村厖吠月不已。沿流而下者二里許。思睡。因脫行李。臥月。鄉夢纔結。寒風一陣。忽然夢斷。則月未沈。霜氣滿衣。皎然如雪。身在米良幽谷深山中矣。因謂。此游非不得已者。單身深夜。落萬里之外荒山之間。忽然而斃。則家人悲痛如何哉。為之慘然者久之。又行一里許。天明矣。大霧罩山。

午前漸霽。山無平地。人家多剝平山復而住之。既而得山溪稍闊處。有人家數十。茅屋蕭然。又行里許。路又嶮。溪水自兩山間瀉。急流如箭。觸石而吼。崖石皆成長斧劈斲法。溪路或沿亂石而過崖下。或蹈巖頭而行山復。山石崩頽處。橫木於巖角。以通路。木已半朽。或生耳。或生苔。蹈之鬆然脆。木片碎而散。飄々遙入溪水中。恐其折而墮。進步為遲。路旁有異卉奇艸。見朱實纍々。垂於枯枝。有翠鳥。恰々止于危巖。好山怪石。應接不遑。目有山。又恐失足陷不測。目在足。又恐失好山。既而路絕。攀巖角。蹈亂石而過。忽逢一危巖露頭角於峭壁巖然斜出其上。有丹楓黃葉。錯松檜中。溪風偶起。楓葉片々。散落溪水中。奔湍翻錦。疑是桃花片。自洞口流出。覺仙鄉不遠。山少平地。焚草卉。種菜簞於木根岩間。採菜服者。多抱樹身。捆巖角而下。人家極少。十山一家。百溪十室。終日行幽谷中。逢人甚少。酉時達稻荷祠。乞宿。炊飯。羹菜。煮山榘供之。其翌早起。辭祠而去。自此至佐土原。路稍不嶮。只行幽谷森林中。嗚乎。寂寞幽谷。蕭條深山。彼有何娛樂而安此土耶。豈以生乎寂死乎寞。不知寂之為寂寞之為寞。不知惡衣食之為惡衣食耶。然視彼蠹々起。蚩々寐。不知道德仁義為何物。則太古之民亦不過如此。抑亦快活矣。吾嘗讀老子怪其言之過激。今而吾知其有為而發矣。

## 釈文

### 米良紀行

戊午の冬南子（南部裕）は將に米良に游ばんとす。某月日を以て玖麻客舎に宿りて、主人に米良の行程を問う主人曰う、米良の行程は道路嶮惡にして、且つ五穀は生えず、土人只稗稗（大稗と草稗、つまらぬ穀物）甘藷の類を食し、屋は亦矮小（粗末で極く小さい）にして宿る可き家は無しなり。ここより距てること七十里稻荷祠有り。祠を司る家はやや寛ぐには廣く、米良に遊ぶには多く宿に成す。余は以て路は険しくとも晷あしが短く、早ぐに非ず能はずに行く、其の夜糧（弁当、携帯食糧）を戒て、夜半湯前を發つ。時に月色は晴朗なるも霜氣人に逼り、行くこと一里ばかり一溪有り。溪に入りいち里ばかり又路を得る。偶ま樹下に一木標有るを見る、白くして書は右米良に走く、墨痕猶お新しく林下暗黒然として髣髴（ぼんやり）にして字を辨（判読する）ける。これより溪路は至つて小くなり、行くこと十數歩に高い山有り。既に之を踰えると又二つの山有り。相對して立つている、満山樹を生じ路は山腹に在るも、甚だ小さく纔に一人通れる。落葉鞋に没す其の深さ三尺ばかり。歩を移して行けば漱々聲有り、

宿鳥の驚き起きたる。路は左右み古木榎材（細く突き出ている）。偶たまま巨蟒（大蛇）前において横たわるを見る。駭おどき杖を駐とどめ之れを熟視（充分に注意して良くる）老樹の影なり。二里ばかり樹間を行く、行くこと谷底を度り遙か籟（魚）が聞える。それは溪水の聲なり。樹は絶し路は稍や大きくなるも、一里ばかりで路は又小さくなり、羊腸（曲がりくねって）谷底に達す。下る半ば遙に鶏の聲を聞える、人家遠からずを覺えるも既に谷底に達す。二三軒の破屋有り。寒燈（寂しげな燈火）壁に漏れ耿耿（明るく）星の如く、足音蹙然（足音のするまま）谷に響く。村の吠が月に脛える己は流に沿つて下ること二里ばかり、睡りたく因つて行李を脱ぎ、月に臥し郷夢纔かに結ぶも、寒風一陣忽然夢を斷つ。月は未だ沈まず霜氣衣を滿つ。皎然雪の如く、身は米良の幽谷深山の中に在り、因つて謂う。此の遊び己に得せずおのれに非らず。單身深夜萬里の外に落ち荒山の間に、忽然斃れたならば家人の悲痛いばかりかと、慘然として久しく又行くこと一里ばかり。天明け大霧山に罩める、午前そらに漸く霽れても山には平地無く、人家多くは山を削りて平かにして住む。山溪稍や闊く處を得て、人家數十軒有り。茅屋（茅葺きの粗末な家）蕭然（物寂しい）又行くこと一里ばかり、路は又嶮しく、溪水は兩山の間から瀉ぎ、急流は箭の如く、石に觸れて吼える、崖石

皆長い斧の劈皴へきしゆん（ひび割れて裂けたような）法きまりを成す。溪路けいろの亂石らんせきに沿つて崖下がいかを過ぎり、或は巖頭がんとうを蹈ふんで山腹ほうたいに行き、山石崩ほうたひ（崩れた）の處木は、巖角がんかくに横たわりて路に通じ、木は半ば朽ちて或は茸生じ或は苔を生じている。之を蹈ふんで鬆然しやうぜん（髪を乱し）を脆くじけやすく木片は碎けて散じ、飄々ひようひよう遙か溪水中けいすいに入り、其の半ば朽ちた木は折れて、墮おちるを恐れて進む歩は遅くなる。路旁ろほうには異弁奇艸いへんきそう有り。朱實しゆじつ纍々いらいを見る枯枝に垂れて翠鳥じりり有り。恰々きがん（鳴き声のさま）危巖きがんに止る。好山怪石應まさに接して遑いとまなし。目は山有り又足を失いて、不測おに陥おちるを恐れて目は足に在り。又好山を失うを恐れる。既に路は絶し巖角がんかくに攀よじりて、亂石らんせきを蹈ふんで過ぎる。忽ち一危巖きがんの頭角とうかくより峭壁しやうへき（切り立った険しい崖）が巖然ぎぜん（一際高いさま）斜しやめに露あわれる。其の上で出逢う、丹楓黄葉たんふうひやう有り松檜しょうかいの中に錯まちわる。溪風偶けいふうたまま起り楓葉ふうよう片々へんへん落ち溪水の中けいふつたまたに散る。奔湍錦ほんたんを翻ひるがえして、疑うは是れ桃花とうか片々へんへんかと洞口どうくうより流出りゅうしゅつす。仙郷せんきやう遠からずを覺える。山は平地少まれにして草莽そうへんを焚たいて、菜簍さいぶく（大根、すずしろ）は木の根や岩の間に種うえて、菜簍さいぶくを採るの多くは樹身がんかくを抱く、巖角がんかくの下で搥つかみとる。人家は極めて少なく十山一家百溪十室で終日幽谷しゅうこくの中しゅうを行く。人に逢うこと甚だ少まれにして、酉時ゆうじ（午後六時頃）稻荷祠いなりじに達する。宿乞やどこい飯を炊き菜を羹あつもの（汁）にしてこれ

に山椒を供えて煮る。其の翌日早く起きて祠辭して去る。これより佐土原に至る。路は稍や嶮しからず、只幽谷森林の中を行く。嗚乎。寂寞（寂しく閑かな）幽谷蕭條（物寂しい）深山において彼（村人）何の娛樂有りや此の土耶（耶は感嘆の意を表す助字）に安んずるは以てああ寂しく死すあ寞しくはないだろうか、寂これ寂を為し寞を為すを知らず。悪衣食は之れ悪衣食を為すを知らずや、然り彼蠹々（虫が蠹くような）と起ちて視る。蚩々（愚かなさまと嗤い）と寐り。道德仁義を知らず何物を為す。則ち太古の民亦此の如くに過ぎず。抑も亦快活な吾嘗て老子を讀み其の言の過激を怪む。今にして吾れ其の有するを知りそしてこの地を發つなり。

語釈 米良紀行 米良に旅した紀行文。米良 米良の庄、山間部の僻地、宮崎県西米良村。戊午 安政五年一八五八。南子 南部五竹。游 旅する。玖麻 熊本県に有る川。客舎 旅館。米良 地名。行程 行動の予定。嶮惡 嶮しく悪い。五穀 國、米、麦、粟、稗、豆。稗稗 犬稗と木賊稗、つまらぬ穀物、転じてつまらぬ物のたて。甘諸 サツマイモ。矮小 小さい、短小。稻荷祠 稻荷の祠。七十里 周里は一里六丁、日本里は一里三十六丁、約四十七キロ。司祠者 祠を司る者、神官。寬廣 広くゆつたり。路險 道が険しい。晷短 日の光が短い。糧 食糧、弁当。戒 用心して備える、戒める。夜半 夜中。月色 月の光。晴朗 晴れ渡つて。霜氣 霜の寒気。逼 迫る。偶 偶然。樹下 樹木の下。墨痕 書いた墨の痕。猶新 猶新しい。髣髴 さながら、良く似たさまほのか、はっきりしないさま。辨ず 弁える、判る。溪路 谷沿いの道。踰 越える。纔 わずか、少し。鞋 草

鞋 漱々＝漱く、洗う、口を漱ぐ、うがいをする。 榱材＝細かく角張って突き出るさま。 巨蟒＝大きな蟒蛇。 駭＝驚く。 駐＝止める。 熟＝熟視。 籟  
 松籟、風の音。 蓋＝思うに、なんぞ。 溪水＝谷の水。 稍＝稍。 羊腸＝羊の腸のように長く曲がりくねる。 兩三＝二つか三つ。 破屋＝屋。 寒燈＝寒々  
 とした灯火。 耿然＝あきらか、明る、光る。 窴然＝足音、恐々とそとあるさま。 厖＝大きい、豊か、厚い。 吠＝吼える、犬が泣く。 行李＝柳や  
 竹で編んだ荷物をいれる物。 臥＝横臥、寝る。 纒＝僅か、少し。 忽然＝突然、急に。 皎然＝白い、真つ白なさま。 幽谷＝幽かな谷。 深山＝深い山。 單身  
 一人。 深夜＝夜遅く。 萬里＝一万里、とても遠い。 荒山＝荒々しい峻しい山。 斃＝倒れて死ぬ。 悲痛＝痛い悲しみ、非常な悲しみ。 如何＝どうして。  
 慘然＝惨めなさま。 天明＝月明かり、月光。 罩＝覆う、籠、魚を捕る竹の籠。 霽＝晴れ。 山溪＝山奥の谷。 闕處＝開けた所。 茅屋＝茅葺きの家。 蕭然  
 ひっそりと寂しいさま。 瀉＝水を注ぐ、流す、吐く、掛ける。 剉＝削る、刈る、平らにする。 吼＝咆哮、吼える。 崖石＝崖の石。 長斧＝長い斧。 劈＝  
 裂く、引き裂く、分ける。 皴＝皴、皴。 法＝傾斜の角度、方法。 亂石＝散らばった石。 崖下＝崖の下。 箭＝矢竹、矢がら、篠竹、矢。 巖頭＝岩  
 の頂。 崩頹＝崩れ剥げ落ちる。 耳生え＝茸生え。 巖角＝岩の角。 鬆然＝髪が乱れるさま、明らか、荒い、緻密でない。 脆＝脆い、弱い。 飄々＝ひら  
 ひらと風に吹かれ舞上がるさま。 墜＝落ちる。 路旁＝道ばた。 異弁＝変わった花弁。 奇艸＝珍しく変わった草。 朱實＝朱の実。 蕤々＝葛、蔓草、まことわ  
 りつく。 恰々＝鳥の鳴くさま。 危巖＝危ない巖。 應接＝應對。 逆＝慌ただし、忙しい。 陷＝陷落、落ちる。 攀＝よじ登る。 頭角＝頭が他より出て居る。  
 峭壁＝峻しく屹立した壁。 巖然＝山が一際高いさま、一際優れて居るさま。 斜＝ななめ。 丹楓＝丹色の楓、紅葉した楓。 黃葉＝黄色の葉。 松檜＝松と  
 檜。 錯＝錯誤、混じる、交える、メッキ。 溪風＝谷の風。 楓葉＝楓の葉。 翠鳥＝緑の鳥。 片々＝ひらひらと。 落溪＝谷に落ちる。 奔＝迸る、流れる、  
 奔流。 湍＝早瀬、たぎる、渦巻く、水が激しく流れる。 翻＝ひらひらと翻り。 桃花片＝桃の花びら。 洞口＝洞穴の入り口。 流出＝流れ出る。 仙郷  
 仙人の郷。 草弁＝草や花弁。 焚き＝燃やす、焚き火。 菜蔬＝菜に大根。 捆＝捆む。 終日＝一日中。 幽谷＝幽かな谷。 西時＝今の午後六時頃。 宿乞  
 い＝宿を頼む。 菜羹＝菜を煮る。 祠辭＝祠を辞去。 佐土原＝地名宮崎県。 寂寞＝寂しく静かなさま。 蕭條＝物寂しいさま。 深山＝深い山。 娛樂＝  
 喜び楽しむ、楽しみ。 豈＝願つ、どうして。 寂＝寂しい。 死生＝死と生。 冥＝静か。 蠢々＝蠢く、虫がごそごそと動くさま。 蚩々＝嗤つ。 寐＝寝る、

眠る。道德<sup>たいてく</sup>＝人のふみ行すべき正しい道、老子の説いた道と徳。仁義<sup>じんぎ</sup>＝仁、親愛の心と義、道理に適うこと、道德の総称。太古<sup>たいこ</sup>＝大昔。抑<sup>よく</sup>＝抑も、抑留、  
抑える。快活<sup>かいかつ</sup>＝楽しみ、楽しい、快樂、さっぱりとした性質で元気の良いこと。嘗て<sup>かつ</sup>＝以前に。老子<sup>らうし</sup>＝周代の人、姓は李、名は耳字は伯陽、道家の祖と  
される。過激<sup>かげき</sup>＝激しすぎる。

山氣日夕佳是五柳先生之詩也蓋采菊東籬之際悠然而仰即夕陽晚入紫氣一抹氤氳乎南山之面於是乎有適乎先生之心而作矣何處無山何日無夕唯靜者能知靜中趣噪進盲動者雖易三世焉得而言之哉先生不競榮利不樂紛華退而居于環堵之中中淡知泊如言詠自娛以全晚節千載之下想見其為人如光風霽月此詩雖出乎偶然而天真發露恰稱其為人予故嘗曰是先生自道也丹邱藤楷甫取於其詩以名其樓曰夕佳屬記於予予与楷甫相識于千里外羈旅之中則其樓未得登也未登而記之豈不亦難乎雖然先是余游西肥逍遙乎丹邱野略知其地勢丹邱之為地左右皆山也其山清秀而其地幽靜雖未知与潯陽之山孰佳然於幽人高士肥遯棲遲之地為宜想楷甫日之夕觀易已終開樓窗詠先生之詩則山色浮動落幽窗間於是乎先生之心有適乎楷甫之心矣因取其詩以名焉或曰其詩之佳有適乎楷甫之心故名焉或曰其景之佳有適乎楷甫之心故名焉嗚呼是真知楷甫者乎哉余雖未登其樓而知其意不專在其景之与詩也是以不辭而為記楷甫名模沈靜好讀書不喜喋々殉世者其志蓋在晚成云

釈文

夕佳樓記  
せきからうき

山氣日夕に佳し是れ五柳先生「陶淵明」の詩なり、菊を采る東籬の際悠然として、夕陽を仰ぐ日はうすら  
さんき にちせき よ こりゅうせんせい とうり きわゆうぜん  
ぎ晩に入りて紫氣一株の氤氲（気の和らぐ）南山の面これ先生の心に適う作なり。  
くれ しき いっしゅう きんた

何処にも山無く何れにも夕無く唯だ静かに能く静中の趣を知る、噪進（忙しく進む）盲動（無闇な行動）三世  
えいり きそ ふんか そつしん  
易きと雖も焉くんぞ得て言う之れ、先生の栄利競はず紛華を退いて樂します、環堵（小さな狭い家）の中に  
いす  
居いて淡泊を知り言詠自から娛しむが如し、以て晩節は千載の下想い見る、其の人の為す光風霽月の  
すま たの ばんせつ せんざい おも こうふうせいげつ  
如し此の詩の出ずること、偶然と雖も天真発露恰も其の人の為すを称す、予は故に嘗みに曰う是れ  
くうぜん てんしん はつろ あたか じゆん  
先生の自からの道なり、丹邱藤楷（仙人の棲む処藤で作った階段）用取し其の詩以て名し其の樓に曰う日夕佳  
たんきゅうとうかい  
し属して記す、まえもつて楷甫と与えて相識るす。  
かいほ あいし

ここに千里の外羈旅（旅の）の中則ち其の樓に未だ登るを得ず、未だ登らずして之れを記す豈亦た難し  
せんり きりよ ちゆう ぶん  
からずらずや、然ると雖も先ず是れ余が西肥に遊び逍遙（のびのびして満足）、丹邱の野路略其の地勢を知  
せいひ あそ しゅうたう はんきゅう ぼぼ ちせい

り丹邱たんきゅうの地さゆう左右を為す皆これ山なり、其の山の清きに秀いでて其の地は幽静ゆうせい（奥ゆかしくひっそりとしている）、未だ知らずと雖も与ともに潯陽しんよう（五柳先生の土地）の山はいずれも佳く然るに人里離れて静かに暮らしている人や人格が高潔な人々が心にゆとりをもつて俗世間を逃れて気楽な生活をしちるところ（肥遯棲遲ひとんせいぢ）、冥想を為し楷甫かいほの日に是れ夕陽觀易くして終わる。棲窗を開きて詠む先生の詩則ち山色浮動幽窗の間に落つ是れ、先生の心に適う楷甫かいほの心かな、因つて其の詩を取りて以て名し、或は其の詩は誰が適うや、楷甫かいほの心故に名して、嗚呼ああ、是れ其の楷甫を知る楷甫かな、余は其の楼には未だ登らずと雖も、其の意専らにせずとも知る、其の景と詩と是れ以て辞せずこの記を為す、楷甫かいほの名を模し沈靜讀書を好み、喋々ちやちや（口数多く喋る）世に徇るを喜ばず其の志こころざしは晩成に在り。

へ考察や五柳先生こと陶淵明の心境こそ自分の求めようとする人生ではないかと、また五柳先生こそ現実の仙人ではないだろうかと、仙人の住む家は藤で作った楷かきがあると云つ伝説から想い重ねて、この人こそ現実の仙人の始まりと云う意で「楷甫かいほ」と敢えて識して表現したものと考察される。

〔参考〕

五柳先生「飲酒」二十首の中の五首

結廬在人境

いおり  
廬を結んで人境に在り

而無車馬喧

しか  
而も車馬の喧しき無し

問君何能爾

よ  
君に問う何んぞ能く爾ると

心遠地自偏

おのず  
心遠く地自から偏なり

採菊東籬下

と  
菊を採る東籬の下

悠然見南山

ゆうぜん  
悠然として南山を見る

山氣日夕佳

さんき  
山氣 日夕に佳し

飛鳥相与還

飛鳥 相与に還る

此中有真意

しんい  
此の中に真意 有り

欲辨己忘言

べん  
辨ぜんと欲して己に言を忘れる

(解説)

人里に廬いおりを構えているが、役人どもの車馬の音に煩わされることわれない。(どうしてそんなことがあり得たのだ)とお尋ねか。なあに、心が世俗から遠く離れているため、ここも自然と僻地の地に変わってしまうのだ。東側の垣根のもとに咲いている菊の花を手折りつつ、ゆつたりとした気持ちで、ふと頭をもたげると、南方遙かに廬山のゆつたりとした姿が目に入る。山のたたずまいは夕方が特別素晴らしく、鳥たちが連れ立って山のねぐらに帰って行く。

この自然の中にこそ、人間のありうべき真の姿があるように想われる。しかし、それを説明しようとしたとたん、言葉などもう忘れてしまった。

語釈

夕佳楼記ゆうかろうき＝楼の記事。山氣さんき＝山の空気、山の気配。日夕にせき＝日に夕に。佳かい＝佳、佳い、良い。五柳先生ごりゅうせんせい＝陶淵明、家の門前に五本の柳を植えて五柳先生と自称した。蓋はて＝思つに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説、なんぞ、はんこの助字。采さいす＝採る、栽培。東籬とうし＝東側の生け垣、竹を組んで巡らした垣根。際あわ＝脇、側。悠然ゆうぜん＝ゆつたりと落ち着いたさま、長閑なさま、陶潜、飲酒詩、采菊東籬下、悠然見南山。夕陽せきやう＝夕陽、夕日。晚えん＝暗い。紫氣しき＝暗い気。一抹いちまつ＝筆の一刷毛、一なすり、一寸、僅か、多少、弦楽器を演奏するとき、一度弦を押さえて抑揚をつける。氤氲いんうん＝気

の盛んなさま、気の和らぐさま、声の調子が良いさま。南山＝終南山の略、藁嶺。乎＝よ、や、呼びかけの言葉、かな、かな感嘆を表す。面＝面す。  
 盲動＝考えもなく行動する。噪＝早い、慌ただし、急ぐ、騒ぐ、喧噪、噪る。趣＝さま、風情、味わい、急いで行く、向かう。雖＝唯、助字解説、  
 確定の助字、けれども、仮定の助字、たとい、としても、これ、発語の助字。焉＝いづくんぞ、なんぞ疑問反語の意を表す、これ、ここに、これより、  
 これにくまに用いる助字、か、や、疑問反語の意を表す。采利＝繁栄と利益、采達と名利。競はず＝競争しない。紛華＝派手で華やか、賑やか、繁華。  
 環堵＝垣根を廻す、家の周りを垣根で塞ぐ、遮る。淡中＝淡い中。自娛＝自ら楽しむ。晩節＝晩年、晩年の節操、末世、末年、時代の終わりのころ。千載  
 「千年。想い＝思い、想い。光風＝光景と風景。霽月＝晴れた月。偶然＝偶々、丁度、天真＝自然のままで飾り気のないさま。発露＝現れる、現す、現  
 れ。恰も＝丁度、ぴったり。嘗て＝以前、前に。曰く＝云う述べる。丹邱＝仙人の棲む所、昼夜常に明るいという國、戦国時代の地名。藤梧＝楼＝楼  
 閣、夕佳＝夕べに佳い。属＝委嘱、頼む。楷甫＝一点一画をきちんと書く法又その書体、手本。与＝共に。相識＝互いに知る。于＝ここに、これ発  
 字の助字、文首文中に用いる助字、に、補語場所を示す、を、補語を示す、より、から、比較場所を示す、おいて、か、かな、文末に  
 あつてぎもん感嘆を表す。千里＝約四千里。羈旅＝旅に繋ぎ止める。豈＝あに、どうして疑問反語の助字、なんと感嘆の意を表す、それ、その、ほと  
 んど助字解説。西肥＝西肥後。逍遙＝伸び伸びとして満足したさま、のんびりと気ままにぶらつくさま。遊ぶ＝訪れる、旅、行く。乎＝よ、や、呼  
 びかけの言葉、かな、か、感嘆を表す、ああ、か、や、疑問反語を表す、形容詞につけて強く状態を表し、に、を、より、場所、時間、目的、比較を表  
 す助字解説。略＝概略。地勢＝土地の状態、山、川、平野などの形勢。左右＝左に右。清秀＝清らかで秀でる。幽静＝幽かで静かな。潯陽＝唐代の地  
 名、いまの江西省九江県、その付近の揚子江を潯陽江という。孰＝いずれ、つまびらか。佳然＝佳いさま。幽人＝ひっそりと暮らす人、人里離れて静  
 かに暮らす人。高士＝人格が高潔な人、品行の優れた人。肥遯＝心にゆとりをもって俗世間から逃れる。棲遲＝憩つ、気楽な生活をする、静かに生活す  
 る、隠退する。觀易＝見易い。棲む＝棲息、住む。窗＝窓。詠む＝詠む、詠じる。＝山色＝山の色、山の風景、景色。浮動＝ふわふわと動く。幽窗  
 「幽かな窓、寂しい窓。適＝佳く適う。景＝風景、光景、景色。嗚呼＝感嘆詞。真＝真に、本当に。楼＝夕佳楼。与＝共に。辞さず＝断らない、帰

らない。模しも〓模写も、写す。沈静ちんせい〓静かに修まる。讀書どくしょ〓書を読む。喋々ちやうちやう〓口数多く喋る。殉世じゆんせい〓世のために殉じる。蓋けだし〓思うに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説、なんぞ、反語の助字。晩成ばんせい〓遅く成る。

傳曰。深山大澤。必生龍蛇。余之遊肥後也。果得魁偉之士數人焉。其最年少。而有寄才者。熊府早川子規乎。子規為人。敦篤喜文。絕遊謝交。杜門讀書。翛然自樂焉。一日謂余曰。昔三代之盛也。厥禮。冠婚葬祭。厥器。簠簋豆。可謂備矣。厥樂。韶虞象武。厥器。笙簫琴瑟。可謂雅矣。厥書。三墳五典詩書易。可謂正矣。是故古之君子。所見非簠簋則籩豆。所聞非簫笙則琴瑟。所讀非三墳五典則詩書易。是以非辟無由入古之君子所以養德可謂至矣。世衰道微桑間濮上。於是乎作。俳優侏儒。於是乎作。異端邪說。於是乎作。然詩書未亡。禮樂猶存焉。及秦坑儒焚書。先王之道。幾熄矣。自漢而降。世愈降。道愈污。其有禮樂。亦叔孫之禮樂耳。甚則簫笙雜簞策。琴瑟和羯鼓。雅樂與胡聲。相混。不可以奏于宗廟矣。至于今日。則三絃之調急聲淫者。戲劇之笑人泣人者。及佛老之虛無妄誕。洋夷之異說淫巧。凡惑人悅人者。無所不有。桑間濮上。俳優侏儒。楊朱墨翟。不啻也。可勝嘆哉。夫三代之禮。至矣。盡矣。三代之樂。善矣。美矣。而不可復見焉。演戲雜劇。我不好也。急管繁絃。我不喜也。邪說淫巧。我不取也。我有弊廬。足以蔽風雨矣。我有蔬食。足以免餓矣。我有弊衣。足以禦寒矣。有此三足。又奚外求。食吾食。衣吾衣。々

而暖。食而飽。々而讀吾書。峨々乎聳於前者。太古以前之山歟。決々乎流於前者。大古以前之水歟。颯然而至者。非萬古之風乎。皎然而來者。非萬古之月乎。對萬古之風月。面萬古之山水。而讀萬古之書。是與羲皇稷契。且暮相遇也。何樂加焉。當此之時神融氣旺覺有浩然塞于天地之間者豈非是大素之初一元氣乎若使此氣無餒乎西山之餓亦甘焉。而況其他乎然則世人呼我。為首陽之餓士亦可。呼我。為陋巷之寒士亦可。呼我。為葛天之民亦可。呼為。為無懷之民亦可。譽之何益。毀之何損。我則登吾堂。爰食。爰飲。爰寢。爰讀書。淡乎。泊如。爰養吾素而已矣。因名堂曰養素。請為之記。岩國南裕。奇其言。謂之曰。善哉。子規蓋幾乎道矣。子之言足以為記矣。余又何言。

安政五年戊午春三月念二。于韓邨書屋。

以下五篇寓木門之作時年二十八

## 釈文

### 養素堂記

つた 傳えて曰う深山大澤必ず龍蛇が生ず。余は之れ肥後に遊ぶなり。果して魁偉の士數人を得る。其の

最年少にして寄才有りそれ熊府の早川子規なり。子規の人と為りは敦篤にして、文を喜び遊びを絶ち交りを謝し。門を杜して書を読み翛然と自から樂しみ、一日余に謂い曰く。昔三代の盛なり、厥の禮は冠婚葬祭、厥の器は簠簋籩豆を備うと謂う可しなり。厥の樂は韶虞象武。厥の器は笙簫琴瑟は雅と謂う可しなり。厥の書は三墳五典詩書易を正に謂う可しなり。是れ故に古の君子は見る所簠簋籩豆に非らず則ち聞く所簫笙琴瑟に非らず、則ち三墳五典を讀む所に非らず則ち詩書易是れ以て辟は由無く非らず。古の君子の徳を養うことと謂う可しに至る。世は衰え道は微に桑間濮上にして是れを作すに於て俳優侏儒（身長の低い小人を昔士侯貴族の家で芸人俳優にした）。是れを作す異端邪説是れを作す然しながら詩書末だ亡びず、禮樂猶お存して秦は書を焚き儒に坑するに及ぶ。先ず王の道幾く熄なり。漢より而て降る。世は愈いよ降る。道は愈いよ汚し。其の禮樂有るも亦た叔孫の禮樂に基だしく簠簋籩簞に雜り琴瑟羯鼓に和し。雅樂と胡聲と相混りて可らず宗廟に奏でて今日に至る。則ち三絃の調べ急聲淫なるは戯劇の人の笑い人の泣くそれに及んで佛老虛無妄誕洋夷の異説淫巧凡そ人を惑し人を悦ばずは有る所無し。

桑間濮上、俳優侏儒は楊朱墨翟と対立した。「楊朱が岐（岐路 分かれ道）を見て人間の心も向かう方向で善と惡とに大きく別れることを知り泣いたという故事」に當ならずなり。嘆き勝る可しなり。夫れ三代の禮。至るなり。盡るなり。三代の樂は善なり。美なり。而て復た見る可からず。演戲雜劇を我は好まずなり。急管繁絃は我れ喜ばずなり。邪説淫巧は我れ取らずなり。我れに弊廬が有り。以て風雨を蔽い足すなり。我れに蔬食が有り。以て餓を免れ足すなり。我れに弊衣が有り。以て寒禦を足すなり。此の三足が有り。又た奚外に求む。吾れ食を食し。吾れ衣を衣る。衣は而て暖にして食は而て飽にして飽は而て吾れ書を讀む。峨々として前に聳るそれ。太古以前の山は歟。決々として前者は流れる。太古以前の水は歟。颯然と而て至るそれ萬古の風に非らず。皎然と而て來るそれ萬古の月に非らず。萬古の風月に對し。萬古の山は水に面す。而て萬古の書を讀む。是れ羲皇稷契與に。且つ暮に相遇うなり。何んぞ樂を加える。此の時に當り神融の氣旺は浩然として天地の間を塞ぐそれ有るを覺る、豈是れ大素の初一の元氣に非らず、若し此の氣に餒無し、西山の餓は亦た甘し。而て況んや其の他、然り則ち世人は我れを呼ぶ。首陽の餓士は為す亦た可なり我れ呼ぶ。陋巷の寒士と為す亦た可なり我れ呼ぶ。葛天の民と

為すも亦た可なり呼び為す。無懷の民も亦た為す可し。之の譽は何んの益。之れ毀す何の損。我れ則ち吾れ堂に登る。愛食。愛飲。愛寢。愛書を読み。淡に。泊る如し。愛吾れ素を養い而て已になり。因に堂の名を養素と曰く。之の記を請い為す。岩國南裕。其の言は奇なり之れ謂い曰く。善哉。子規は蓋し幾道なり。子の言を足し以て記を為すなり。余は又た何んぞ言つ。安政五年戊午春三月念二。ここに韡邨書屋

以下五篇木門に寓す之作る時年二十八

### 語釈

養素堂記 素を養う堂の記。傳 口伝、伝える。深山 深い奥山。大澤 大きな沢。谷 龍蛇 龍と蛇。肥後 熊本県。魁偉 身体が大きく立派。奇才 才がある。熊府 熊本。早川子規 人名。篤 篤い、人情が厚い、誠意がある。敦 厚い、真心が厚い。子規 早川子規。杜 門を閉ざす。脩然 物事にとられないさま。早いさま。厥禮 厥、その、それ、その禮。冠婚葬祭 元服して冠を被る、結婚式、葬式、祭礼。厥器 その器。簋 祭器で黍を盛って供える。簠 祭器で穀物を盛って供える。籩 竹製で果実を盛って供える。豆 木犀で塩等を盛る。韶虞 舜帝の音楽。夔樂 夔、象武 武に似せる。笙 笛、管楽器の一つ、十九管ある、または十三管ある。簫 笛、竹管を横に並べて作つた笛二十四管。琴 瑟 琴の大型のもの。雅 雅。厥書 其の書。三墳五典 太古の書物の名。古い書物の意味しる。詩書易 詩経、書経、易経。辟 除く、退ける、止める。桑間濮上 桑間濮上の音、淫靡な音楽、桑間は濮水のほとりの地名、濮上は濮水のほとり、何れも河南省、此の地方の音楽は淫乱であつたといわれ

る。俳優はいゆう 役者。侏儒しよじゆ 短小、短い、小人。異端いたん 正統でない教え、聖人でない別の学説。邪説じせつ 正しくない説。禮樂れいがく 礼儀と音楽。中国では古くから、礼は社会の秩序を整え、楽は人の心を和らげる物として、政治上特に重視された。礼樂記より。秦しん 秦國。坑儒きやうじゆ 儒者を穴に。焚書ふんしよ 書を燃やす。熄そく 消える、休む、埋もれ火、終わる。愈ゆ いよいよ。叔孫しよくそん 叔孫通、漢代の博士で劉邦高祖が皇帝の位についたとき、漢の朝廷の儀式、制度を定め、漢王朝の權威を高めた。筆策ひつさく 雅樂の樂器。羯鼓けこ 胡の太鼓、ばちで両面を叩くもの。雅樂ががく 昔の正しい音楽上品な音楽、平安時代以後宮中で行われた音楽。胡聲こせい 胡の聲。與よ 共に。宗廟そうぼう 祖先の御靈屋、國家。奏そう 奏上、演奏する。三絃さんげん 絃が三本の樂器。佛老ぶつらう 釈迦と老子、仏教と老子の教え。調急てうきふ 調子が急で高い。聲淫せいゐん 声が淫ら。戲劇げきぎ 芝居、演劇。虛無こむ 道家の根本原理である道のこと、何も無くて目に観ることのできないもの。妄誕ばうたん 出鱈目、偽り。淫巧ゐんきやう 淫らで巧みに。楊朱ようしよ 戰国時代の思想家で個人主義を唱えた。墨翟もくたく 戰国時代の思想家で博愛主義を唱えた。啻し 唯、只。演戲えんぎ 芝居を演じる。雜劇ざつぎ 雑多な劇。急管きふかん 急に笛を吹く。繁絃はんげん 頻繁に絃を引く。邪說じせつ 正しくない説。弊廬へいろ あばら屋、自分の家を謙遜していう。蔬食そしき 蔬菜の食事、粗末な食事。餓が 飢餓。弊衣へいゐ 粗末な着物。寒禦かんぎよ 寒さを防ぐ、防寒、防御。奚外けいがい 中国東方の種族名。飽ほう 飽きる。峨々がが 山の高く峻しいさま。聳そびえ 聳え立つ。太古たいこ 大昔。颯然さつぜん さつと吹く風のさま、音。萬古ばんこ 一万年もの昔。大變たいへん 大變に古くより。皎然けうぜん 真つ白なさま、明らかな。羲皇ぎきう 伏羲の尊称、王羲之の略称。稷契しやくけい 堯舜に仕えた二人の名臣。稷は農業を司り、周の祖先となり、契は教育を司り、殷の祖先となつたと、伝えられる。神融しんじゆう 神に通じる、神と一つになる。氣旺きわう 旺盛、氣が盛んな。浩然こうぜん 広大なさま、ゆつたりとしたさま。塞ふさ 塞く。穴や道を塞ぐ。首陽しゆやう 周の初め、伯夷と叔齊が餓死したという山。陋巷ろうきやう 狭い街路、貧民街、路地裏。寒士かんし 身分の低い人、貧しい士、人。葛天かつてん 中国の神話上の帝王の名、教化をしななくても世の中が治まつたという。無懷むゐ 中国の伝説上の帝王の名。爰えん ひく、たすける、ここにかえる。堂どう 公事を行う場所、建物、高殿、表座敷。養素ようそ 素質を養つ。鞞邸いそんてい 木下鞞邸。肥後の藩士、五竹の師。書屋しよおく 学舎。戊午ぼし 安政五年一八五八。